

# 内堀遺跡群 VII

一大室公園整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報一

1995

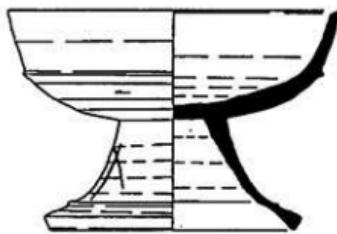
前橋市教育委員会







# 内堀遺跡群 VII



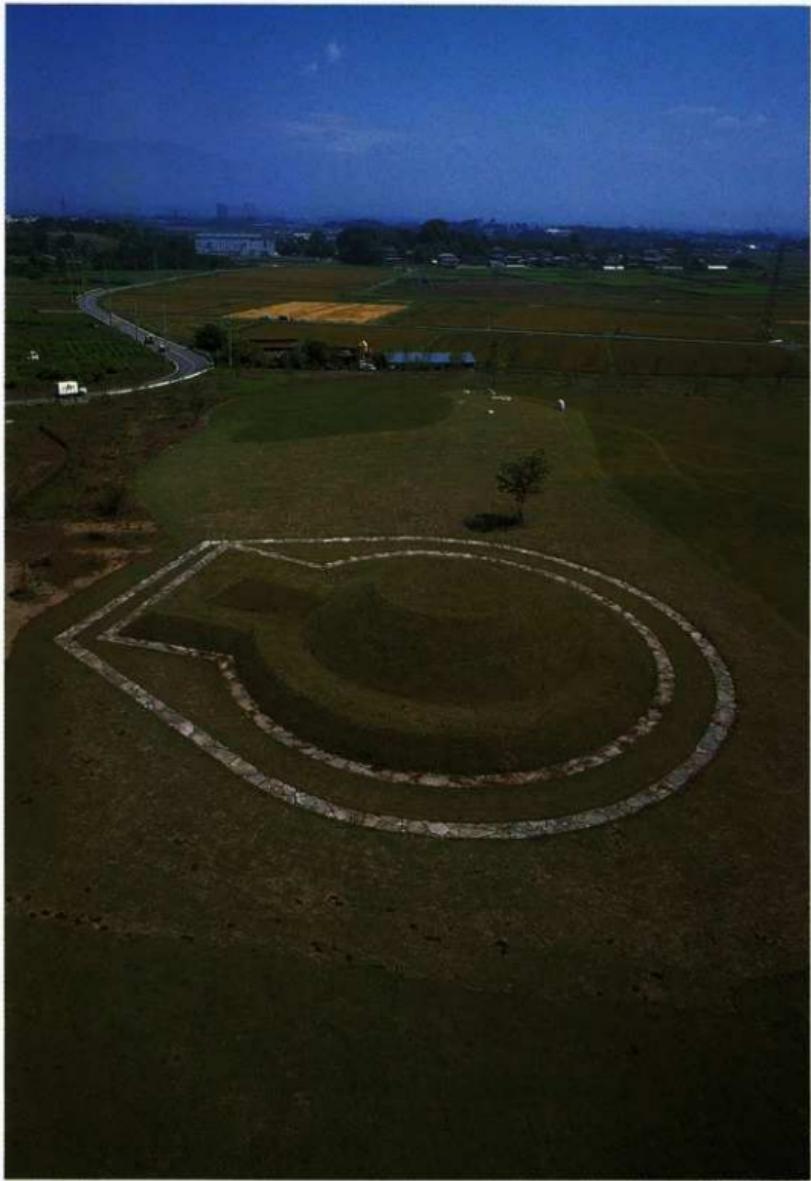
II-5号住居址出土の高杯

前橋市教育委員会





調査区と五料沼



復原された内堀M-1号墳

## 序

前橋市は、名峰赤城山の裾野に位置し、水と緑の恩恵を受け、今から23000年前より連綿と歴史を育んできた足跡が市内のあちこちに残る群馬県の県都です。

市では、活力と魅力ある総合機能都市を目指して、憩いの場、スポーツの場、遊びの場、教養の場としての公園づくりを進めてきています。その事業の一環として、市域東部に広がる田園地帯に、広がりのある景観、豊かで多様な自然、貴重な史跡に恵まれた大室公園を造ることになりました。

内堀遺跡群は、大室公園整備により消滅してしまう遺跡を発掘調査した遺跡群です。発掘調査は、昭和62年度の確認調査を経て、昭和63年度から始まり、本年度で第7年次を迎えました。国指定史跡大室3二子古墳（前二子・中二子・後二子古墳）周辺での調査ということで、これまでに地域の歴史を知る大変貴重な資料を得てきました。

本年度は、大室公園内に位置する五料沼北側の切り土部分1200m<sup>2</sup>を調査しました。その結果、縄文時代の住居址1軒を初めて検出し、古墳時代の集落として住居址10軒、中世の環濠のものと推定できる溝状遺構1条、ほか溝1条、土坑1基等の遺構、完全な形に復原できそうな土器が50個体以上という多量の遺物の検出等、大室地区の古代の姿をうかがい知ることができ、多大な成果をあげました。

本書は、その調査の概要をまとめたものです。本書が大室地区の歴史を解明する一助となり、大室公園整備、大室3二子古墳整備、資料館建設、古代住居復原等の現在進行している諸事業に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なるご協力をいただきました前橋市公園緑地部を始めとする関係諸機関、ならびに各諸氏に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成7年3月24日

前橋市教育委員会

教育長 岡 本 信 正



## 例　　言

- 1 本報告書は、前橋市が整備する大室公園に係る内堀遺跡群下繩引II遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は群馬県前橋市西大室町2539番地に所在する。
- 3 調査は、前橋市教育委員会が実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

調査担当者 前原 豊・戸所慎策（文化財保護課埋蔵文化財係）

発掘調査期間 平成6年4月25日～平成6年7月29日

報告書作成期間 平成7年2月20日～平成7年3月24日

- 4 本書の原稿執筆・編集は前原・戸所が行った。整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐藤佳子・高畠八栄子・竹内るり子・角田正次郎・内藤貴美子・吉田真理子の協力があった。
- 5 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管されている。

## 凡　　例

- 1 採図中に使用した北は座標北である。
- 2 採図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/5万地形図（前橋）を使用した。
- 3 本遺跡の略称は6E11である。
- 4 各遺構・住居址の施設名の略称は次のとおりである。  
J…縄文時代の住居址、H…古墳時代の住居址、D…土坑、W…溝状遺構、  
F…炉址、P…柱穴・貯蔵穴
- 5 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。  
遺構　住居址・土坑・溝…1/60、全体図1/500  
遺物　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2
- 6 スクリーントーンの使用は次のとおりである。  
遺構平面図　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑  
遺構断面図　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線  
遺物実測図　須恵器断面…黒塗、石器使用痕…網
- 7 遺物分布図のシンボルの使用は次のとおりである。  
●…土器、○…土製品、▲…鉄器、■…石器・石製品  
なお接合状態は実線で結んだが、個体別資料数の多いものは結んでいない。
- 8 火山降下物の略称と年代は次のとおりである。  
As-B(Bテフラ：供給火山・浅間山、1108年)  
Hr-FA(FAテフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭)  
As-C(C軽石：供給火山・浅間山、4世紀中葉)

# 目 次

## 序

I 調査に至る経緯 .....	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地.....	1
2 歴史的環境.....	3
III 調査の経過	
1 調査方針.....	6
2 調査経過.....	8
IV 層序 .....	8
V 遺構と遺物	
1 住居址.....	10
2 土坑.....	14
3 溝状遺構.....	14
4 グリッド出土の遺物.....	14
VI 成果と問題点	
1 縄文時代.....	14
2 古墳時代.....	16
3 中世.....	17

## 図 版

口絵 1 調査区と五料沼	口絵 2 復原された内堀M-1号墳
P.L. 1 平成6年度調査区全景	P.L. 10 H-7~9号住居址
2 遺跡全景	11 H-9・10号住居址、W-1・2号溝、 D-1号土坑
3 平成6年度調査区と風のわたる丘・復 原された内堀M-1号墳	12 繩文土器
4 調査区北側、J-1号住居址	13 J-1・H-1~3・6~7号住居址 出土の土器・石器・石製品・鉄器
5 J-1・H-1号住居址	14 H-4~6号住居址出土の土器
6 H-1~5号住居址	15 H-6~8号住居址出土の土器
7 H-4・5号住居址	16 H-5・8~10号住居址出土の土 器・石製品
8 H-6号住居址	
9 H-6・7号住居址	

## 捕 図

頁	頁
Fig. 1 内堀遺跡群の位置	
2 内堀遺跡群と周辺遺跡	2
3 内堀遺跡群調査全体図	4・5
4 平成6年度調査経過図	6
5 平成6年度内堀遺跡群全体図	7
6 内堀遺跡群標準土層図	9
7 J-1号住居址	22
8 J-1号住居址	23
9 H-1号住居址	24
10 H-2号住居址	25
11 H-3・5号住居址	26
12 H-4号住居址	27
13 H-6号住居址	28
14 H-6・7号住居址	29
15 H-7号住居址	30
16 H-8・9号住居址	31
	Fig. 17 H-10号住居址、 W-1・2号溝、D-1号土坑
	32
	18 J-1号住居址出土の土器
	33
	19 J-1・H-1~3号住居址 出土の土器
	34
	20 H-4~6号住居址出土の土器
	35
	21 H-6~8号住居址出土の土器
	36
	22 H-7~9号住居址出土の土器
	37
	23 H-9・10号住居址出土の土器
	38
	24 J-1・H-1・2号住居址 出土の石器
	39
	25 H-2・4~6号住居址 出土の石器
	40
	26 H-6・7号住居址出土の石器・ 石製品
	41

## 表

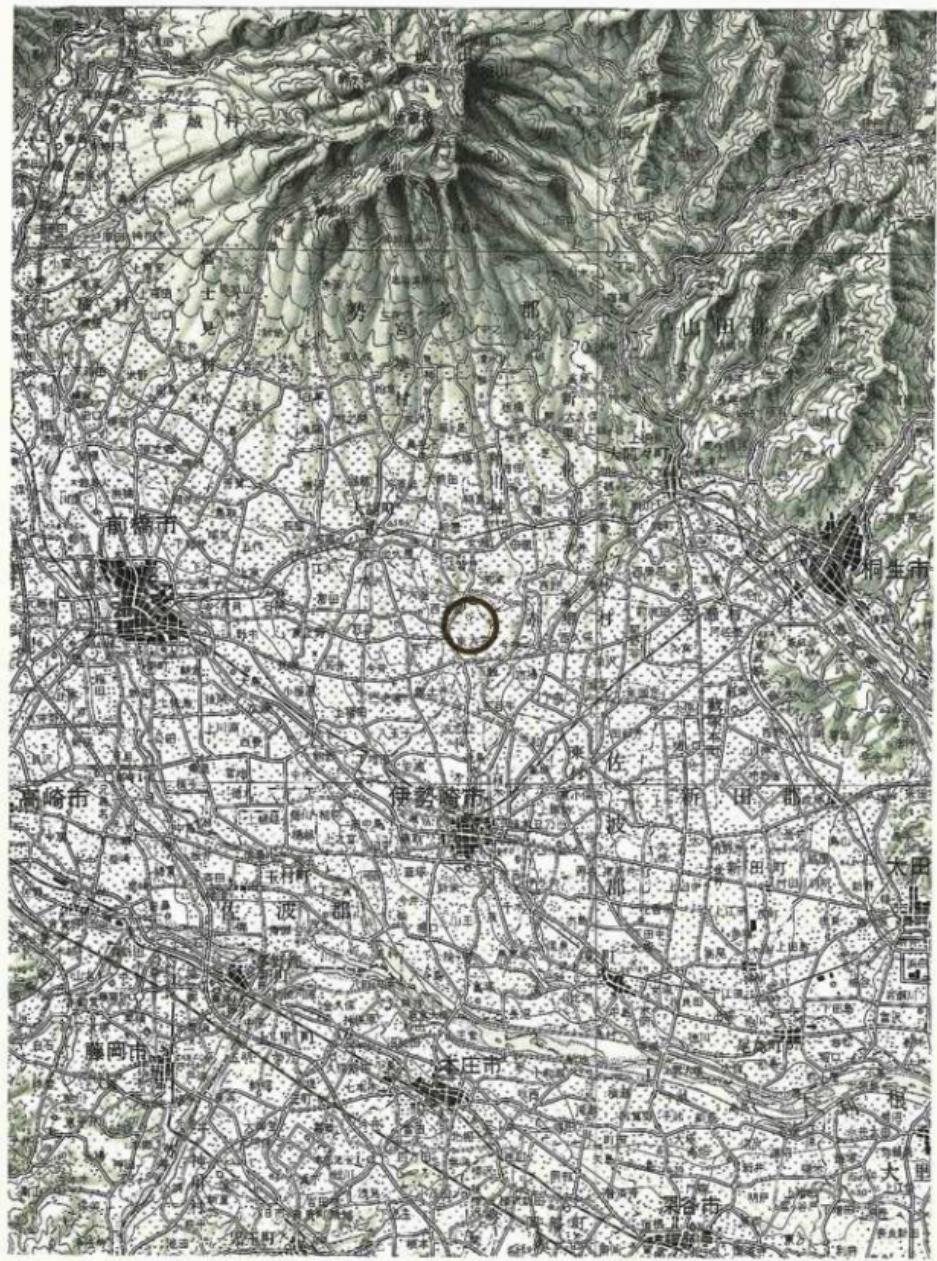
Tab. 1 調査抄録	頁
	Tab. 2 遺物観察表
	19~21

## 発掘調査報告書抄録

ふりがな	うちほりいせきぐん なな							
書名	内堀遺跡群VII							
副書名	大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻次	第7巻							
シリーズ名	-							
シリーズ番号	-							
編著者名	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課 埋蔵文化財係 主任 前原 直 〃 〃 主任 戸所慎策							
編著機関	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課							
編著機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4							
発行年月日	1995(平成7)年3月31日							

ふりがな 所収遺跡群名	ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 極	東 緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
			市町村	遺跡番号					
内堀遺跡群	下闕引II遺跡	前橋市西大室町 2539番地	10201	6E11	36°23'15"	139°12'00"	1994.04.25~ 1994.07.29	1200	公園造成

所収遺跡群名 所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項
				集 落	主 な 遺 物	
内堀遺跡群 下闕引II遺跡	包含層	縄文時代	住居址 1軒 土坑 1基 包含層	縄文土器 (諸器 a)・石器		貼り床と床下土坑の検出。
	集 落	古墳時代前期	住居址 5軒	土器群 (赤井戸式・博式系を含む)		隣接する周溝墓群と関連を有する集落。
	集 落	古墳時代中期 古墳時代後期 平安時代～ 中世	住居址 2軒 住居址 3軒 環濠 1条 溝 1条	土師器 土器群・須恵器・石器・石製品 -		中世の環濠の東端を検出。



1:200,000 宇都宮

0 5 10 15 20 キロメートル

Fig. 1 内堀遺跡群の位置

## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で8年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

昭和62年度は、公園予定地約369000m<sup>2</sup>のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳や山林、沼などを除く約200000m<sup>2</sup>について東西に10m間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知るとともに、その結果を踏まえ（内堀遺跡群Iに収録）、昭和63年度には予定地の北西部約10000m<sup>2</sup>についての発掘調査を実施した（内堀遺跡群II）。また、平成元年度は、昭和63年度調査区の西側を中心に約12600m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した（内堀遺跡群III）。平成2年度は、昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9000m<sup>2</sup>・確認調査の面積は約2500m<sup>2</sup>で合計11500m<sup>2</sup>である（内堀遺跡群IV）。

平成3年度は、平成元年度第I調査区の南および西側に隣接したL字形の区域約4000m<sup>2</sup>について、後二子古墳・小二子古墳範囲確認調査とともに発掘調査を実施した。平成4年度は公園予定地の北西部にある自然丘陵の東側と西側の部分約9400m<sup>2</sup>について、前二子古墳の範囲確認調査と並行して発掘調査を実施した。また、M-6号墳の範囲確認調査や一部試掘調査も行った（内堀遺跡群V）。

平成5年度は、五料沼の北側の部分3130m<sup>2</sup>について、2カ年計画の2年次の中二子古墳範囲確認調査の前に発掘調査を実施した（内堀遺跡群VI）。

今年度の調査は、昨年度の調査区（A区）の水路をはさんだ東側の部分1200m<sup>2</sup>について、2カ年計画の2年次の中二子古墳範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した。調査した部分は公園整備が予定されている地域で、記録保存を目的とした調査である。なお、初年度以前の経緯については『内堀遺跡群I』に詳しく述べられているので本書では省略する。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の立地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15kmの所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ2kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東1kmに位置している。またJR両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約7kmにあり、上毛電鉄

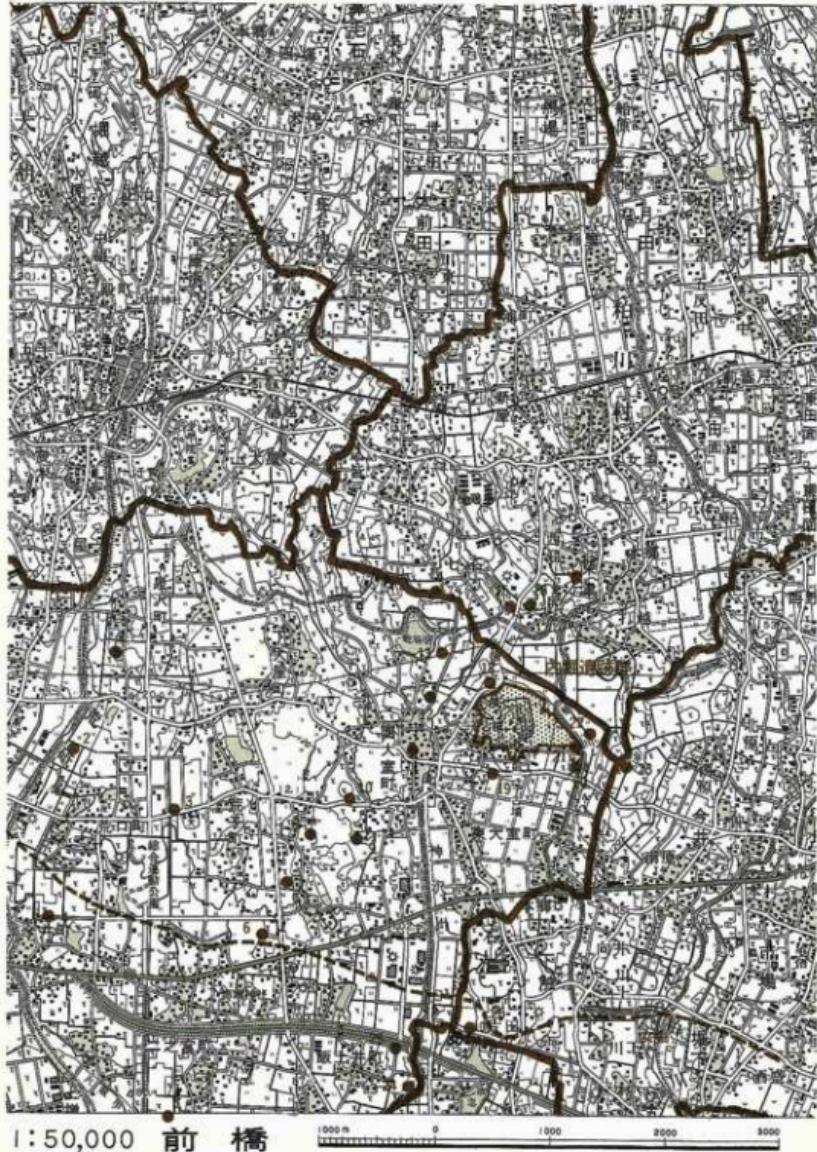


Fig. 2 内堀遺跡群と周辺遺跡

柏川駅からは南南西に約3kmにある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する柏川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

平成6年度の調査区は内堀遺跡群（公園予定地）の北に位置し、昨年度の調査区の水路をはさんだ東側になる。

本遺跡群の東端には五料山とよばれる自然丘陵があり、また、後二子古墳の南側、さらには前二子古墳が造られた所も丘陵地形となっている。この地区的丘陵地形の基盤は、すべて粗粒安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。また、平成3年度調査区内から小さな谷地が入り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。現在五料山の西側には小河川が流れているが、近世頃にこの谷地の南側に堤を造り、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下網引I遺跡や柏川村五反田遺跡の存在からこの地域を当時の生産基盤と考えることが難しいため、上記の谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。本遺跡地の標高は、129m～130mである。

## 2 歴史的環境

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、大室3二子古墳を始めとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡群を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、旧石器時代の遺跡として、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に尖頭器がまとまって出土した荒砥北三木堂遺跡①、A T下の国内最大の「環状ブロック群」が検出された下触牛伏遺跡②、また、宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群③においてナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。

続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡④がある。二本松遺跡⑤や柳久保遺跡群からは、田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は、荒砥二之堰遺跡⑥、荒砥上ノ坊遺跡⑦、荒砥上課防遺跡⑧など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代の遺跡は水田耕作に適した冲積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡⑨、荒砥上川久保遺跡⑩、西原遺跡⑪、西迎遺跡⑫などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては、本遺跡の北西に隣接する上網引遺跡⑬をはじめ、北山遺跡⑭、七ツ石遺跡⑮、久保皆戸遺跡⑯、梅木遺跡⑰などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共に伴する。そのうち、浅間C軽石降下後およびFA降下前の各遺跡の住居は、内堀

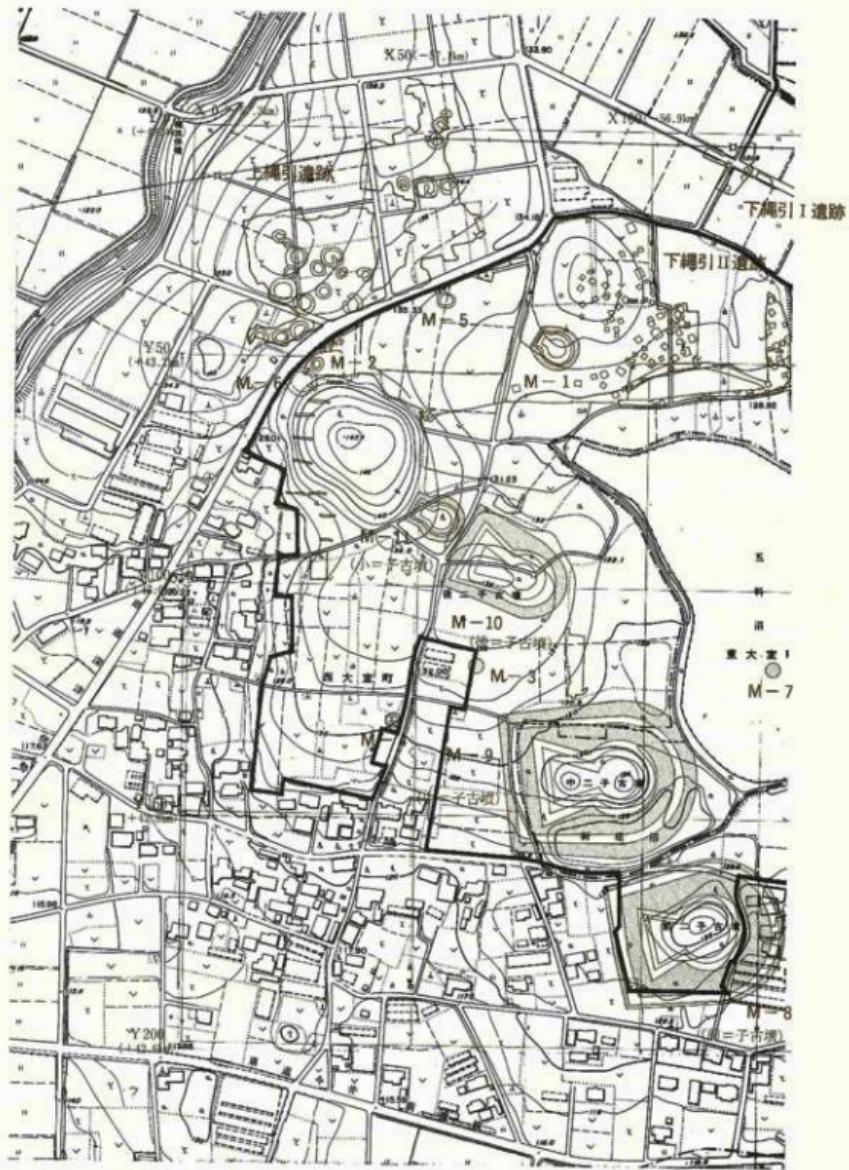


Fig. 3 内堀遺跡群調査全体図



遺跡群下繩引II遺跡の集落に対応するものであると考えられる。また、下繩引II遺跡の集落の墓域として上繩引遺跡の周溝墓群を考えている。5世紀後半から6世紀代に入ると、赤堀茶臼山古墳②をはじめ強大な支配者の存在を暗示する大室3二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は大室3二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡⑦、丸山遺跡①などがある。また、荒砥荒子遺跡の豪族居宅遺構と関連し、舞台遺跡1号古墳⑧および西大室丸山遺跡⑨があり、豪族の勢力格差により居宅・古墳の規模、祭祀行為に相違があったことが窺える。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1~3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。柏川村深津の三ヶ尻西遺跡⑩では、7世紀後半の製鉄遺構3基と住居跡が確認された。古墳群が密集した地域であることから、有力な豪族が招いた技術者の集落址で製鉄品造りの拠点になっていたと推定される。また、西大室では赤城南麓の古墳時代終末期を代表する鐵石切組積石室をもつ富士山古墳⑪が築造され、高度な石材加工技術を習得していたことが窺える。

奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、荒砥諏訪西遺跡②では微高地まで水田化している。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。また、奈良～平安時代の炭窯址が横須賀遺跡群や柏川村の西原古墳群、大胡町の上大屋・櫛越地区遺跡群等の近隣市町村から検出されており、当時赤城南麓の近隣で盛んに木炭生産が行われていたことが窺える。中世以降の城郭としては、大室城⑫、元大室城⑬、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

### III 調査の経過

#### 1 調査方針

調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた原点を据えて、内堀遺跡群全体グリッド（4mグリッドを基本とし、西から東へX0～X250・北から南へY0～Y200グリッドの設定枠）を用いた。ちなみにX125-Y50グリッドは第IX系の+43200.000m～+56800.000mで、北緯36°23'15".8002・東経139°12'00".4300に当たる。調査面積は1200m<sup>2</sup>である。

調査には期間的制約があるため掘削用重機を用いて表土の除去を行い、As-Cが混じる黒色土面もしくは、淡色黒ボク土上面を出した。Fig. 4 平成6年度調査経過図



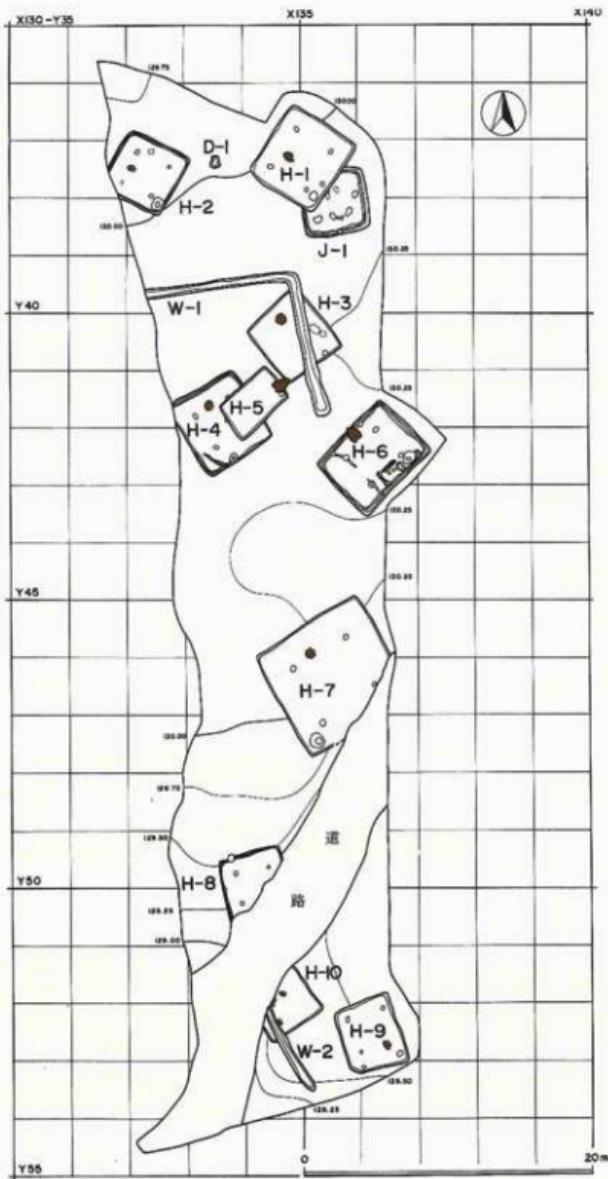


Fig. 5 平成 6 年度内堀遺跡群全体図

この時点で直ちに古墳時代以降の遺構の確認に入り、並行してグリッド設定、ベンチマーク(水準点)の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討した。具体的には

- 1 遺構の掘り下げは、セクションベルトを設けて土層観察を行いながら進める。
- 2 遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。
- 3 炉と竈の図化については、原則として縮尺1/10にて、遺構平面図については、原則として縮尺1/20にて実施する

以上の方針の下に調査を進めた。

## 2 調 査 経 過

発掘調査は、平成6年4月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを十分行ってから、現場事務所の設置や発掘調査用具の搬入など本格的な準備を行い、4月25日より発掘調査を開始した。バックフォー(0.7m<sup>3</sup>)と4tダンプトラックとで北側から表土掘削を開始した。表土掘削に追従してプラン確認を行い、4月27日に杭打ちを実施し、4月28日には表土掘削は終了した。5月9日から遺構の掘り下げを進めた。調査の結果、住居址11軒・土坑1基・溝2条が検出された。調査面積は1200m<sup>2</sup>。その間、6月3日に業者委託によるラジコンヘリコプターの空中写真撮影、6月6日より住居平面図・遺跡全体測量を行った。6月6日からは縄文の住居址の精査を中二子古墳の調査と並行して行った。6月20日には、土器の水洗・注記もすべて完了した。6月30日にはJ-1号住居址の精査と図面の最終確認を行い後は埋め戻しのみとなった。中二子古墳の調査の進捗と合わせて7月22・25日に重機による埋め戻しを実施し、7月29日をもって残務整理を終え、7月一杯で全調査を終了した。

調査区の西側は五料沼に流れ込む水路で、また、南側の一部は公園造成前の道路により遺構が切られていたのは残念であった。

遺物整理作業と報告書作成は中二子古墳の報告書作成作業の終えた2月下旬より3月24日まで行った。また、2月1日と2日には、五料沼北側の公園造成工事による試掘立ち会いを行った。平成5年度調査の溝W-14・16号に続くと思われる溝1条を確認した。

## IV 層 序

X98-Y23グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。本遺跡は、内堀遺跡群の北東部に存在し、約20~30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形成された「流れ山」を中心とした標高129~137mの丘陵性台地である。「流れ山」の頂上には

梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにVII層のAT（姶良丹沢バミス）が表面から50~60cm程度で検出できる。

- I a層 黒褐色粗砂層。耕作土層。As-B（浅間Bテフラ：1108年降下）を50%以上含む。粘性なく、縮まりあり。
- I b層 黒褐色土層。As-B、As-C（浅間C軽石：4世紀中葉降下）、Hr-FP（株名ニツ岳軽石：6世紀中葉降下）を含む粗砂層。粘性はないが、縮まりはある。
- II a層 As-B純層。天仁元（1108）年に浅間山より降下した軽石層。わずかに間層をはさんで上部にAs-Kk（浅間船川テフラ）が存在する場合もある。
- II b層 黒色細砂層。As-C、Hr-FP（径20mm）を15%含む細砂層。粘性を有し、縮まりあり。II c層 暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、縮まりが弱い。
- III 層 黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。粘性は少しあるが、縮まりが弱い。縄文時代遺物包含層。
- IV a層 明黄褐色硬質ローム層。As-YP（浅間黄色軽石：約1.3~1.4万年前）を10%、As-SP（浅間白糸軽石：約1.75万年前）を5%を含む微砂層。粘性があり、硬く縮まる。
- IV b層 明黄褐色土層。ハードローム層。As-YPを5%、As-SPを10%程度含む微砂層。粘性があり、硬く縮まる。
- V 層 明黄褐色硬質ローム層。As-BP（浅間褐色軽石：1.8~2.2万年前）をブロックで20~30%程度含む層。粘性があり、硬く縮まる。
- VI 層 明黄褐色硬質ローム層。As-BPをブロックで15%程度含む層。粘性があり、縮まりが弱い。
- VII 層 明黄褐色微砂層。風化土壤。粘性を有し縮まりは弱い。AT（姶良丹沢バミス：約2.2~2.5万前）の含有が極大値を示す。
- VIII 層 明黄褐色粘土層。暗色帶。粘性が強く、縮まりの弱い粘土層。色調でa・bの2亜層に分類できる。
- IX 層 明黄褐色粘土層。粘性が強く、縮まりのある粘土層。a~dの4亜層に分類できる。
- X 層 明黄褐色軽石層。Hr-HP（株名八崎軽石：4.2~4.3万年前）。3亜層に分類でき、Xa層是比较的大粒な軽石層、Xb層は火山灰層、Xc層

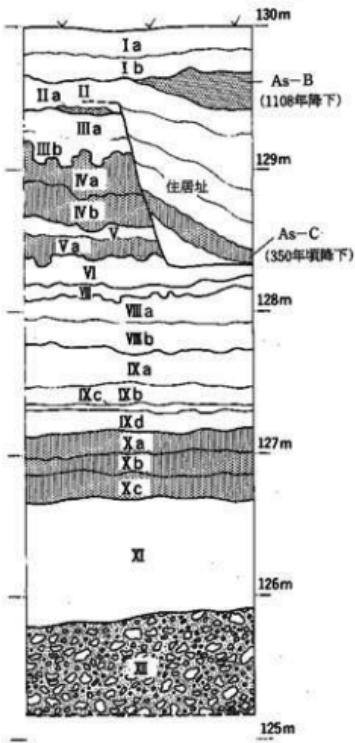


Fig. 6 内堀遺跡群標準土層図

層は軽石層である。

II 層 褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

III 層 青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。栗木泥流（約20～30万年前）によって形成されたと考えられる「流れ山」。

## V 遺構と遺物

本年度の発掘調査では、住居址11軒（1軒は縄文時代）。土坑1基・溝2条が検出された。残念なことに、調査区の西側は五料沼に流れ込む水路で切られており、また、調査区の南側一部は公園造成前の道路により切られていた。昨年度の調査区（A区）の水路の反対側になる。

調査の主体となった古墳時代の住居址は前期が5軒、中期が2軒、後期が3軒である。このうち前期の住居址は、すでに報告されている住居址と合わせると総数104軒になる。このほかに、縄文時代の住居址は内堀遺跡群の調査で初めて検出された。また、土坑は縄文時代の住居址のすぐ西側にあり、住居址との有機的な関係が考えられる。W-1号溝は、昨年度のW-2号溝と接続するものであり、中世の館跡を囲む溝の東側の範囲を決める重要な遺構となった。

### 1 住居址

J-1号住居址 (Fig. 7・8・18・19・24, PL. 4・5・12・13)

(位置) X135・136-Y37・38G (重複) H-1に切られる。(形状) 穴丸正方形 (規模) 長軸4.72×短軸4.66m。確認面からの壁高55cm。(面積) 現存16.01m<sup>2</sup> (方位) N-8°-W (覆土) 3層に大別できる。As-YPを20%含む。(床面) 中央部分に黒色土ブロックによる貼り床。深鉢を用いた埋設土器が1基検出される。(炉址) 中央部やや北よりに焼土や炭化物を検出し、精査の結果、炉址を2基検出した。F<sub>1</sub>はやや北側の中央の西側に位置する。長径56×短径38cmである。F<sub>2</sub>はF<sub>1</sub>の東側にあり長径49×短径35cmである。(柱穴) 総数16個の柱穴を検出した。主柱穴については規則性がなく判然としなかった。また、南西部の周溝内に壁柱穴が部分的に認められた。(床下土坑) 貼り床の下から3基連結した床下土坑を検出した。(周溝) 調査した範囲では全周する。(遺物) 出土遺物は総数434点である。土器が403点、石器が31点である。土器のうち縄文土器は半截竹管文を主体に390点である。半截竹管文の内訳は、幅が広い連続爪形文27点、幅が狭い連続爪形文5点、連続爪形文67点、平行沈線45点、集合沈線47点である。このほかに縄文【L】10点、縄文【LR】26点、縄文【R】5点、縄文【RL】98点、隆脛17点、文様不明38点、無文5点で構成される。混入の土器13点も存在する。石器の内訳は、石匙1点、削器2点、磨石1点、凹石2点、蜂巣石1点、剝片23点、結晶片岩自然礫1点である。石材の内訳は、チャート10点、頁岩8点、黒色頁岩5点、黒色安山岩3点、粗粒輝石安山岩4点、結晶片岩1点である。このうち、土器に

については1~21を図示し、石器は22の石匙、93~96の磨石・凹石を図示した。(備考)縄文時代前期諸磯a式期。

#### H-1号住居址 (Fig. 9・19・24、PL. 5・6・13)

(位置) X134・135-Y36~38G (重複) J-1を切る。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.82×短軸5.50m。確認面からの壁高55cm。(面積) 現存30.91m<sup>2</sup> (方位) N-33°-E (覆土) Hr-FP、As-C、ローム土の混入率の違いにより4層に大別できる。3a層は焼土を含む。(床面) ほぼ平坦であり、堅織面が広がる。(炉址) 地床炉を1ヶ所検出。F<sub>1</sub>・長径75×短径65×深さ14cmの規模。(柱穴) 6個検出。うち4個は主柱穴、貯蔵穴2個。(遺物) 遺物は総数519点。赤井戸式の土器は3%、樽式系の土器は4%と少なく、石田川式土器で占められる。このうち10個体を図示した。混入の縄文土器が2点出土。(備考) 古墳時代前期。

#### H-2号住居址 (Fig. 10・19・24・25、PL. 6・13)

(位置) X131~133-Y36~38G (形状) 南丸正方形 (規模) 長軸4.70×短軸4.31m。確認面からの壁高22cm。(面積) 現存20.49m<sup>2</sup> (方位) N-28°-E (覆土) As-C、ローム土の混入率の違いにより3層に大別できる。2層はロームブロック20%含む。(床面) ほぼ全面に堅織面が広がる。(炉址) 地床炉を2ヶ所検出。F<sub>1</sub>・長径65×短径42×深さ8cmの規模で、炉縁石4個を検出。F<sub>2</sub>・長径35×短径32×深さ7cmの規模。(柱穴) 4個検出。主柱穴は3個検出できたが残りはカクラン内に存在する。南東隅に貯蔵穴。(周溝) 全周する。(遺物) 総数142点の遺物が出土した。赤井戸式の土器は1%、樽式系の土器は4%の割合と少なく石田川式土器で構成される。このうち6点を図示した。ほかに縄文土器2点、石器2点が出土。(備考) 古墳時代前期。西側は水路、中央部の東側も掘削を受ける。

#### H-3号住居址 (Fig. 11・19、PL. 6・13)

(位置) X134・135-Y39~41G (重複) W-1とH-5の煙道部分に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.18×短軸4.81m。確認面からの壁高3.1cm。(面積) 19.63m<sup>2</sup> (方位) N-39°-W (覆土) 1層で、As-Cを10~20%含む褐色細砂層の1層により形成される。(床面) 確認面が浅かったため床面の検出は困難を極めたが、部分的に堅織面が存在した。粘土分布を2ヶ所から検出。N<sub>1</sub>は北側に分布し長径74×短径62cm×厚さ12cmを計る。南のN<sub>2</sub>は長径44×短径40cm×厚さ7cmである。(炉址) 1個検出。F<sub>1</sub>は長径75×短径72cm×深さ14cm。(柱穴) 1個検出した。貯蔵穴と考えられる。(遺物) 総数164点。このうち赤井戸式の土器は32%と高比率を占め、樽式系は3%と少ない。このうち復原できた赤井戸式の台付甕を1個体図示した。ほかに混入の縄文土器5点が出土。(備考) 古墳時代前期。

#### H-4号住居址 (Fig. 12・20・25、PL. 6・7・13・14)

(位置) X132~134-Y40~42G (重複) H-5に切られる。(形状) 圓丸正方形 (規模) 長軸5.78×短軸5.52m。確認面からの壁高31cm。(面積) 現存29.90m<sup>2</sup> (方位) N-32°-W (覆土) 3層に大別でき、As-C、ローム土等の混入度により6層に細分できる。3a層は炉址の上のため焼土を含む。(床面) 南側の壁ぎわを除き堅緻面が広がる。地割れが北西から南東方向に長さ約181×最大幅12×深さ19cm存在。(炉址) 地床炉を1ヶ所検出。F;・長径82×短径50×深さ12cmの規模。(柱穴) 6個検出。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個、P<sub>5</sub>が貯蔵穴である。(周溝) 全周する。(遺物) 総数259点の遺物が出土。このうち9個体を図示した。土器の割合は赤井戸式が7%、樽式系の土器が11%と比較的多かった。混入の縄文土器が35点出土。(備考) 古墳時代前期。

#### H-5号住居址 (Fig. 11・20・25、PL. 7・14)

(位置) X133・134-Y40~42G (重複) H-3とH-4を切る。(形状) 長方形 (規模) 長軸4.46×短軸2.58m。確認面からの壁高20cm。(面積) 推定12.55m<sup>2</sup> (方位) N-50°-E (覆土) As-C・Hr-FPの混入率の違いにより、4層に大別できる。4層は竈の粘土ブロックが30~40%入る。(床面) ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。西壁中央部近くにコの字状に3個の編物石(104~106)を検出。(竈) 東壁中央南寄りに位置。主軸方向はN-54°-Eで、全長155cm、幅90cm。構築材に粘土を用いる。(柱穴) 竈の南隣に貯蔵穴1個検出。(遺物) 総数199点の遺物が出土した。土師器189点のうち、復原できた7個体を図示した。混入した縄文土器8点、石器類2点であった。(備考) 古墳時代後期。

#### H-6号住居址 (Fig. 13・14・20・21・25・26、PL. 8・9・13・14・15)

(位置) X135~137-Y41~43G (形状) 長方形 (規模) 長軸6.59×短軸5.24m。確認面からの壁高46cm。(面積) 32.30m<sup>2</sup> (方位) N-46°-E (覆土) 6層に大別できる。2b層に6世紀初頭に榛名山より降下したHr-FAをブロック状に含む。(床面) ほぼ平坦であり、全面にわたって極めて堅緻な床面が広がる。住居址の西側に818年の地震による地割れ3本を検出。北東から南西方向に北から長さ約78×最大幅18cm、長さ約134×最大幅13cm、長さ約158×最大幅10cmで存在する。(馬蹄形施設) 南壁際に浅い溝で区画を作出する。内部にP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の2個の柱穴が存在する。(竈) 西壁中央に位置。主軸方向はN-45°-Eで、推定全長102cm、推定幅97cmを測る。構築材に粘土を用いる。支柱には本体に石を用い、その上に土器を使用。(柱穴) 9個。4個の主柱穴を検出した。このうち、対角線上にあるP<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の底部には柱受けの粘土が貼られていた。貯蔵穴はP<sub>5</sub>でありP<sub>6</sub>は床下土坑である。(周溝) 全周する。(遺物) 総数686点の遺物が出土。土師器645点、須恵器9点、混入の縄文土器32点で構成される。図示した遺物は18個体である。(備考) Hr-FAを覆土に有する事から5世紀末葉の年代が当てられる。古墳時代後期。

H-7号住居址 (Fig. 14・15・21・22・26, PL. 9・10・13・15)

(位置) X134~136-Y44~47G (形状) 正方形 (規模) 長軸8.38×短軸8.30m。確認面からの壁高12cm。(面積) 現存59.29m<sup>2</sup> (方位) N-63°-E (覆土) 2層に大別できる。1a層に炭化材を含む。(床面) ほぼ平坦で、中央部に堅緻面が広がる。(炉址) 地床炉1個検出。長径69×短径63×深さ16cm。(柱穴) 主柱穴4個と貯蔵穴1個を確認。(遺物) 総数781点の遺物が出土した。土師器771点、鉄器1点、金属製品1点、繩文土器が7点、石器類1点で構成される。図示したものは9個体。(備考) 古墳時代中期。南東部分を公園造成前の道路に切られる。

H-8号住居址 (Fig. 16・21・22, PL. 10・13・16)

(位置) X133・134-Y49・50G (形状) 正方形 (規模) 長軸4.6×短軸(3.5)m。確認面からの壁高17cm。(面積) 現存13.20m<sup>2</sup> (方位) N-76°-E (覆土) 2層に大別できる。2層は炭化物を含む。(床面) ほぼ平坦であり、全面に堅緻面が広がる。(柱穴) 主柱穴4個のうち3個が確認できた。残り1個は道路によって削平を受け存在しない。(周溝) 調査した範囲では全周する。(遺物) 総数137点の遺物が出土。内訳は土師器のほかに石器類3点、玉類1点である。6個体の土器を図示した。(備考) 東壁に竈を有する事が考えられる。古墳時代後期。南東側は道路で削られて調査できなかった。

H-9号住居址 (Fig. 16・22・23, PL. 10・11・16)

(位置) X135・136-Y51~53G (形状) 長方形 (規模) 長軸5.10×短軸4.15m。確認面からの壁高23cm。(面積) 19.31m<sup>2</sup> (方位) N-17°-W (覆土) により3層に大別できる。(床面) ほぼ平坦であり、床面はやわらかい。(柱穴) 5個。主柱穴4個と柱穴1個を確認。(炉址) 1個検出。長径64×短径55×深さ15cmの地床炉。(遺物) 総数2134点の遺物が出土した。このうちの大半は住居址中央の覆土上半から廃棄された状態で出土している。時期的には後期の土器であった。鉄器・金属製品が2点出土。図示した遺物は廃棄された後期の土師器を含めて15個体である。(備考) 古墳時代前期。

H-10号住居址 (Fig. 17・23, PL. 11・16)

(位置) X134・135-Y51・52G (重複) W-2に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸4.28×短軸3.74m。確認面からの壁高16cm。(面積) 現存10.97m<sup>2</sup> (方位) N-55°-E (覆土) Hr-FP、As-Cの混入率の違いにより3層に大別できる。(床面) ほぼ平坦であり、中央部に堅緻面が広がる。(炉址) 3個検出。F<sub>1</sub>は長径60×短径22×深さ14cm、F<sub>2</sub>は長径44×短径25×深さ10cm、F<sub>3</sub>は長径30×短径22×深さ8cmの地床炉。(遺物) 総数600点の遺物が出土した。土師器のほかに繩文土器が1点、石器類3点が出土。このうち7個体を図示した。(備考) 古墳時代中期。西北は道路により削平されていた。

## 2 土 坑

### D-1号土坑 (Fig. 17, PL. 11)

(位置) X133-Y37G (形状) 長径0.80×短径0.50×深さ0.43mで橢円形を呈する。(覆土) 黒色土とローム土の混じりで1層。As-YPを含む。(備考) 出土遺物はなかったが、覆土がJ-1号住居址の覆土と共通することから、縄文時代の所産といえる。

## 3 溝 状 遺 構

### W-1号溝 (Fig. 17, PL. 11)

(位置) X132~135-Y39~41G (形状) 溝の上部を削られているため、薬研掘の断面形を呈していないが、位置や大きさなどから昨年度調査のW-2号溝と接続する。溝の幅52~112cm、深さ22~54cmで、東西10.2mの長さで南に折れ曲がる。南北延長は10.2mを計る。(覆土) 大きく2層に分けられる。(遺物) 総数112点の遺物が出土したが全て混入品であった。(備考) 中世の環濠(既出資料から14世紀代の所産)と考えられる。

### W-2号溝 (Fig. 17, PL. 11)

(位置) X132~135-Y39~41G (重複) H-10を切る。(形状) 断面は逆台形である。幅42~72cm、深さ13.5~32cm程度で、長さ6.5mを発掘調査する。(覆土) 大きく3層に分けられる。(遺物) 総数31点の遺物が出土したが住居址より流入したもの。(備考) 時期を決定できる遺物がないが、覆土にAs-Bを含んでいないため、それ以前の所産か。

## 4 グリッド出土の遺物

淡色黒ボク土の上面にて遺構確認中に確認された縄文時代遺物の散布が少ないので、包含層としての特別な調査は実施しなかった。しかし、古墳時代の住居址に混入して縄文時代前期諸磧a式土器や中期の加曾利E3~4式土器がわずかにみられた。石器も剝片類に留まっており、凹石1点を図示したに留まった。

## VI 成果と問題点

### 1 縄 文 時 代

従来の調査によって、縄文時代の遺物について遺構を伴わない状態で多少検出されていた。内堀遺跡群I(試掘調査)では、各所から縄文土器や石器が検出された。内堀遺跡群IIにおいても

中期加曾利E式土器や後期壠之内式土器の出土が見られた。また、内堀遺跡群IIIにおいても前期から後期にいたる遺物が出土している。内堀遺跡群IVでも古墳時代より以前の調査は実施しなかったにもかかわらず、遺構確認作業で早期末葉から後期にいたる土器や石器が発見された。内堀遺跡群Vでは、ややまとまって土器と石器が検出されている。早期船原式土器をはじめ新潟県を中心に分布をみせる三十稻場式土器の検出や後期壠之内式土器がまとまって検出された。内堀遺跡群VIでも早期末葉の土器をはじめ前期諸磯式土器や中期加曾利E式土器、後期壠之内式土器が検出されている。このように今まで土器や石器が確認されているにもかかわらず、遺構については土器を埋設した土坑を確認したに留まっていた。

今回の調査によって諸磯a式期の住居址を1軒検出することができた。北西部をH-1号住居址によって切られてはいたが、隅丸正方形の平面形をなし、長軸4.72m、短軸4.66mの規模で深さ55cmと明確な掘り込みを有する住居址である。床面はほぼ平坦に造成されていたが、中央部に黒色土による「貼り床」が存在するため、やや窪んでいた。この「貼り床」面には炉体土器を用いた1号炉と地炉である2号炉の焼土が分布することから、「貼り床」形成→1・2号炉の使用といった変遷が考えられる。

この「貼り床」下の調査を行った所、1～3号床下土坑が検出された。1～3号床下土坑の3基がU字形に連結し存在している。1号床下土坑は大きく北側にオーバーハングしており長径1.2m、短径0.6mであり、床面からの深さ0.3mである。2号床下土坑は径0.8m、深さ0.5mである。西に存在する3号床下土坑はH-1号住居址の掘り方を観察する際に掘り上げてしまったものであるが、長径1.0m、短径0.9m、深さ0.5mを計る。これらの床下土坑の遺物は小片の土器が出土したに過ぎない。

さらに、床下土坑そのものはローム土と黒色土によって充填されていたが、貼り床構築土には黒色土のブロックが用いられていた。このブロックが入る範囲は床面から10～20cm下まである。それ以上の深さには認められないことから意識的に床面を構築した結果ととらえられる。

以上の事から住居の構築にあたり、①床下土坑の掘削→②貼り床面形成→③炉の使用といった順番が考えられ、①の床下土坑の形成は住居の構築に含まれる行為としてとらえておきたい。また、住居で使用期間中の行為として床下土坑の形成も十分に考えられるが、いずれにしても床下土坑を住居とは全く別の遺構としてとらえることはできない。また、すでにあった土坑の直上に住居址を構築することも考え難い。

從来、縄文時代住居址内の土坑については、重複関係としてとらえる事が一般的であった。また、明確に貼り床が存在することも指摘されていなかった。しかし、今回の調査によって、古墳時代～平安時代の住居址で顕著に認められる床下土坑の存在が縄文時代においても存在することが明確となった。

今後、縄文時代の床下土坑の類似資料の増加を待って、その性格について解明しなければならない。また、多数検出されている古墳時代以降の住居址に存在する床下土坑との関連性について

も言及する必要がある。現時点では、住居址構造を探る上で貴重な調査事例となった点を指摘しておくに留めたい。

## 2 古 墳 時 代

古墳時代の遺構として、古墳時代前期の住居址5軒、中期の住居址2軒、後期の住居址3軒を調査することができた。すでに調査した住居址と合わせると、前期が住居址104軒、中期の住居址が5軒、後期の住居址11軒となった。調査した範囲で占地をみていくと前期の住居址は標高137.25mの「流れ山」の頂上部から今回調査した標高129mの平坦地まで広範囲に広がりをみせる。その範囲は東西で200mを超える。さらに南北も北の沖積地に広がる下綱引I遺跡の集落と本遺跡の集落は同一の集落になる可能性が高いため、東西と同様200mを超える範囲になるものと思われ、更に東に区域が延長されるものと思われる。それに比較して中期や後期の集落の区域は東側に偏った傾向がみられる。しかし、「風のわたる丘【流れ山】」から東に延びる斜面については発掘調査を実施しているが、西に存在するもう一つの「流れ山」である五料山の西斜面や南斜面にも多くの住居址が存在するため、中・後期の住居址は今後その数が増えるものと期待される。

内堀遺跡群IVの報告書で前期の住居址から出土した土器破片のうち容易に識別が可能なものとして5種類に分類した。それは、縄文施文の破片（赤井戸式）、櫛描文の破片（縦式系）、S字状口縁台付甕片、赤色塗彩の破片、その他である。この5種類の割合についてグラフにしたところ構成比が変移していく結果が認められた。しかし、住居址から出土した土器がその住居址で使用されたものではなく他の住居から廃棄行為によって存在することも考えられたが、その行為があったとしても時間幅はそう大きいものではなく限定されるものと考えて作業を進めた。さらに4世紀中葉に降下したAs-Cも幾つかの住居址で検出されたため、テフラとのクロスチェックも行った。テフラによって埋没している住居址と土器構成比との矛盾はみられなかったため、さらに住居址形態や柱穴、炉、貯蔵穴などの付属施設との検討を行った結果にも共通性が見出せた。

その結果については内堀遺跡群IVですでに述べてあるのでここでは記述しないが、本遺跡の4世紀代の住居址について大きく3時期に分類を行った。その分類に従えば、H-3・4号住居址がII期、H-1・2・9号住居址がIII期に該当する。

古墳時代前期の住居址の構造については、「内堀遺跡群IV」の中で指摘した傾向が認められる。住居の平面形はほぼ正方形を呈し、主柱穴は4本柱が主流をしめる。H-3号は主柱穴が検出できなかった。

中期の住居址の平面形は大きさに差があるが、ほぼ正方形を呈し、主柱穴は4本で、炉址を1箇所有している。

後期の住居址の竈は、H-5号は東壁の南コーナーにより確認された。H-8号は南東の約半分の部分を公園造成前の道路により切られていて竈を検出できなかったが、東壁にあったものと推定される。

H-6号は北壁の中央部に竈が確認された。竈が北壁（北西方向）で確認されたのは内堀遺跡群の中では初めてである。季節風の影響を考えると、季節により使い分けが行われていたのか、特別な意味をもつ住居址なのか今後に課題を残すものとなった。

竈の構築は粘土を主体としてなされていた。H-6号の竈の支柱には土器が使用され、土器の下には石が置かれていた。

H-6号からは弘仁9年（818年）の地震による地割れが南北方向に3条確認され、また、覆土からは6世紀初頭の榛名山の噴火による火山灰（Hr-F A）が確認された。柱穴の底には粘土が貼られていた。これは昨年度までは、III期とIV期（5世紀初頭）に限って施工された技法であったが、V期にまで認められた。須恵器無蓋高杯が出土し、TK-47に比定できることから5世紀後半に位置付けられ、前二子古墳と近接した時期といえる。

### 3 中 世

中世の遺構として、平成5年度に確認された溝W-2号に方向と覆土から接続すると考えられる溝W-1号を検出した。このW-1号の検出によって、環濠の範囲を確定できた。

W-1号の溝の上部は削られており、薬研掘の形は呈していないが、X134-Y39Gではほぼ直角に曲がり、東西方向に長さ10.7m、南北方向に10.2m、幅52~112cm、深さ22~54cmで確認された。しかし、昨年度の溝W-3号に接続すると思われる溝は検出されなかった。五料沼に水を引き込む水路によって後世に削られている。環濠の南東部の範囲については今後の検討を有する。

平成2年度の溝W-9号、昨年度のW-2・3・12・13号から範囲を考えると、北辺約108m、南面約89m、西辺約45m、東辺の北側約10mとなり、東西方向に細長い台形を想起させる。

覆土からノロやラミナ状の堆積は全く見られず、水が流れた形跡はない。これは、溝が空堀であったことを端的に物語っており、昨年度までの調査結果とも一致している。

堀の方向は、北辺は東方向より12度北に、南辺はW-3号は東方向より約33度北に、W-13号では東方向より約25度北に向いている。西辺は座標北方向より約11度西に向いている。東辺は座標北より約15度南に向いている。現地形で北西方向から南東方向にかけて緩やかな傾斜をもって下っている。南は低く谷地（現在は五料沼）になっていることを考慮すると堀の方向のズレは地形に制約されたものと推定される。

今年度の調査では、出土遺物は土器等があるが、他の時代の混入品である。重複している遺構は環濠によって切られ、環濠より古いものと考えられる。環濠と同時代の遺構は確認できなかつた。

昨年度までの調査結果とあわせ、本遺構は、防御を旨とするには幅や深さが県内の遺構より小さく、役にたたないと思われる。また、周辺に付属施設がないことから自立農民層の館跡と推定でき、出土遺物から14世紀代の所産と考えられる。

県内の館跡については、「内堀遺跡群VI」に詳しく述べているのでそれを参照していただきたい。

## 参考文献

- 桑原 昭・國部守央 1988 「内堀遺跡群」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
國部守央・加部二生 1989 「内堀遺跡群II」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
國部守央・鈴木雅浩 1990 「内堀遺跡群III」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前原 豊・伊藤 良 1991 「内堀遺跡群IV」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
伊藤 良・前原 豊 1993 「内堀遺跡群V」 前橋市教育委員会  
開口 孝・前原 豊・戸所慎策 1994 「内堀遺跡群VI」 前橋市教育委員会  
飯塚 試・杉浦つや子ほか 1981 「西大室遺跡群II」 前橋市教育委員会  
加部二生・前原 豊「内堀遺跡群下巻引連跡」「東日本における古墳出現過程の検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会  
江部和彦・前原昭子ほか 1983 「西大室遺跡群IV」 前橋市教育委員会  
千田幸生ほか 1986 「梅木遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
小島純一 1985 「深津地区遺跡群 昭和60年度」 群馬県柏川村教育委員会  
小島純一 1986 「深津地区遺跡群 昭和61年度」 群馬県柏川村教育委員会  
小島純一ほか 1987 「柏川村の遺跡」 群馬県柏川村教育委員会  
小島純一 1988 「堤頭遺跡」 群馬県柏川村教育委員会  
小島純一 1990 「西延遺跡」 群馬県柏川村教育委員会

Tab. 2 遺物観察表

番	出土位置	器形	大きさ 口径 深さ	①胎 土 ②焼 成 ③色 黄 ④模 印 存	器形・製作技術の特徴	登録番号	備考
1	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤手縛竹管による連続爪彫文で平行、弧線文。	175ほか	縞模▲式		
2	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅④口縛部⑤円管文。手縛竹管による木の葉文風の連續爪彫文。	71ほか	縞模▲式		
3	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文と縫目に刻み。	29ほか	縞模▲式		
4	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅④明赤黄⑤半截竹管による連續爪彫文。	229ほか	縞模▲式		
5	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③明赤黄④口縛部⑤縫目に連續爪彫文による横位と縦彫。	145ほか	縞模▲式		
6	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅黄④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文。縫帯に刻み、斜めの平行沈線文。	183ほか	縞模▲式		
7	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③明赤黄④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文。成くり文・縞文R L。5と同一個体。	115ほか	縞模▲式		
8	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文と縫目が対称に入れる横円滑の孔。	111ほか	縞模▲式		
9	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③明赤黄④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文。横位、三角が描かれる。	7ほか	縞模▲式		
10	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文で横位。直線が描かれる。	122ほか	縞模▲式		
11	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅④口縛部⑤半截竹管による連續爪彫文で縫目。3と同一個体。	36ほか	縞模▲式		
12	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③巻④口縛部⑤半截竹管による4条1単位の平行沈線とその軽突、円管文。	103	縞模▲式		
13	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤半截竹管による平行沈線文。縫帯に縞文R L。	113	縞模▲式		
14	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③浅黄④口縛部⑤半截竹管による平行沈線文。	294	縞模▲式		
15	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤円丸と半截竹管による平行沈線文。	337	縞模▲式		
16	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤円丸と半截竹管による平行沈線文と連續爪彫文。	80	縞模▲式		
17	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③浅黄④口縛部⑤半截竹管による横位と斜めの平行沈線文。	H-1	縞模▲式		
18	J-1	縞文探鉢	①細粒②良好③明黄青地原形の縞文R L。半截竹管による平行沈線文。	132	縞模▲式		
19	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③明黄青地原形の縞文R L。円管文。半截竹管による平行沈線文。	96ほか	縞模▲式		
20	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③明赤黄④口縛部⑤縞文R L。	105ほか	縞模▲式		
21	J-1	縞文探鉢	①中粒②良好③巻④縛部⑤縞文R L。	65ほか	縞模▲式		
22	J-1	石器	石器①6.3②7.0③6.0④1.3⑤6.0	56ほか	縞模▲式		
23	H-1	筆	[13.6] (14.0) ①細粒②良好③巻④1/4	外側刷毛目、ナデ。内面横ナデ。	423ほか		
24	H-1	筆	[14.0] (7.1) ①細粒②良好③巻④口縛2/3	外側刷毛ナデ、ナデ。内面横ナデ。	277ほか		
25	H-1	筆	-- 17.0 ①中粒②良好③明赤黄④口縛	外側刷毛ナデ。内面横ナデ。	295ほか		
26	H-1	高杯	-- (6.7) ①細粒②良好③浅黄④口縛部	外側刷毛。内面横ナデ。	409		
27	H-1	高杯	-- (5.0) ①中粒②良好③明赤黄④破片	外側刷毛。内面ナデ。杯部内面7個の刺突痕	57		
28	H-1	台付壺	-- (5.1) ①細粒②良好③明黄青地原形	外側刷毛ナデ。内面横ナデ。	426		
29	H-1	台付壺	-- (30.0) ①中粒②良好③にい模④1/3	外側刷毛目。内面横ナデ、ナデ。	407ほか		
30	H-1	台付壺	-- (7.5) ①細粒②良好③にい模④口縛1/3	外側刷毛目、ナデ。内面ナデ。	287ほか		
31	H-2	蓋台	(7.8) (4.3) ①細粒②良好③明赤黄④1/2	外側刷毛ナデ、ナデ。内面横刷毛。	198		
32	H-2	増	12.5 5.5 ①中粒②良好③浅黄青地④ぼぼ充形	外側刷毛ナデ、抜磨。内面刷毛目。	96ほか		
33	H-2	増	9.8 14.6 ①中粒②良好③巻④ぼぼ充形	外側刷毛。内面ナデ。	99		
34	H-3	台付壺	12.3 21.0 ①粒②良好③にい模④1/4	外側口部～肩部縞文R L。肩部～脚部ナデ。内面ナデ。	183ほか	赤井戸式	
35	H-4	筆	14.5 27.3 ①粒②良好③にい模④ぼぼ充形	外側口部横模様、指押え。肩部波状文、脚部窓書き。内面横ナデ。	88		
36	H-4	台付壺	[8.0] 19.0 ①細粒②良好③にい模④1/2	外側口部縞文R L、耐。内面横ナデ、ナデ。	26	赤井戸式	
37	H-4	杯	12.5 5.3 ①中粒②良好③赤黄④ぼぼ充形	内外面とも窓書き、ナデ。	89	赤色造形	
38	H-4	蓋台	-- (7.7) ①中粒②良好③巻④脚部	外側窓書き。透孔4単位。内面窓書き。	46		
39	H-4	蓋台	-- (7.1) ①中粒②良好③巻④脚部1/2	外側窓書き。透孔4単位。内面窓書き。	25		
40	H-4	台付壺	13.3 (12.0) ①中粒②良好③巻④口縛～脚部	外側口部横模様、口縛～脚部刷毛目、窓書き。内面窓書き。	92	博式系	
41	H-4	手握土器	5.1 2.5 鉢形土器①細粒②良好③明赤黄④先形	内外面ともナデ。	220		
42	H-5	石製品	石器①6.7②4.0③6.0④11.0⑤6.0	外側刷毛目。	61		
43	H-5	杯	[14.7] (3.2) ①細粒②良好③にい模④破片	外側面とも横模ナデ。	76		
44	H-5	杯	[12.0] (3.3) ①細粒②良好③明赤黄④口縛1/3	外側面とも横模ナデ、ナデ。	114		
45	H-5	筆	[15.2] (12.6) ①細粒②良好③にい模④脚部2/3	外側刷毛、横ナデ、ナデ。内面刷毛目、ナデ。	105ほか		
46	H-6	筆	-- (23.7) ①中粒②良好③巻④1/4	外側窓書き。内面窓書き。	516		
47	H-6	便器	[13.0] 8.5 無蓋高杯①細粒②良好③次④1/2	外側刷毛ヘラ削り。内面横模ナデ。	666ほか	TK47期	

番	出土位置	器形	大きさ	①新 土 ②焼成 ③色 調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考	
			口径 奥深					
48	H-6	石製製品	刺形品①2.9②1.9③0.5④0.4cm⑤綠色片岩⑥完形			538		
49	H-6	石製製品	刺形品①3.2②1.9③0.5④1.4cm⑤綠色片岩⑥完形			637		
50	H-6	杯	[14.6] (4.6)	①細粒②良好③によい焼④1/4	外面削り。内面擦ナゲ、ナゲ。	36ほか	内面墨色	
51	H-6	杯	[11.1] (3.7)	①細粒②良好③によい焼④1/2	外側ナゲ。内面横ナゲ。	107ほか		
52	H-6	杯	[3.8] 5.8	①中粒②良好③焼④4/5	外面口縁、横ナゲ、裏削りは軽いナゲ。内面ハクラク	687ほか		
53	H-6	杯	[13.8] 5.5	①細粒②良好③明赤褐色④1/2	外面部ナゲ、ナゲ、裏削り。内面横ナゲ。	250ほか		
54	H-6	杯	12.0	5.6	①細粒②極良③焼④完形	外側ナゲ、ナゲ、裏削り。内面横ナゲ、暗紋	352	
55	H-6	杯	[12.3] 5.3	①中粒②良好③焼④1/3	外面口縁、横ナゲ、ヘラ削り後軽いナゲ内面ナゲ、放熱状の暗紋。	467ほか		
56	H-6	杯	[12.6] (3.7)	①細粒②極良③明赤褐色④口縁部1/4	外面部とも横ナゲ。	630ほか		
57	H-6	高杯	-- (7.3)	①細粒②良好③明赤褐色④内部	外面部ナゲ、内面横ナゲ、ナゲ。	454		
58	H-6	病器皿	[10.0] (2.6)	磁土器①細粒②極良③黄灰④破片	外面凹痕横ナゲ、波状文。内面横縫ナゲ。	451		
59	H-6	甕	-- 12.2	①中粒②良好③赤褐色④底部	外側ナゲ。内面刷毛目。	514		
60	H-7	甕	20.2 33.2	①中粒②良好③焼④はげ完形	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	261ほか		
61	H-7	甕	11.2 6.0	①細粒②良好③浅青褐色④5/5	外面部削り、ナゲ。内面横ナゲ、ナゲ。	243ほか		
62	H-7	青銅製品	黄金具①4.1②2.4③1.5④24.0cm⑤完形			1		
63	H-7	甕	-- (19.0)	①中粒②良好③明黄褐色④底部のみ	外面刷毛目、裏磨き。内面刷毛目、裏磨き。	733ほか		
64	H-7	甕	[16.0] 26.0	①細粒②良好③によい赤褐色④1/2	外面部ナゲ、指印さえ。内面ナゲ、指印さえ。	288ほか		
65	H-8	手塗土器	4.5 3.5	椭形土器①細粒②良好③焼④はげ完形	外面部ナゲ、裏磨き。内面刷毛目。	2		
66	H-8	杯	[11.0] (4.6)	①細粒②良好③焼④破片	内外面とも横ナゲ。	59ほか		
67	H-8	石製品	紙石①9.8×6.7×5.0cm②369.0g③先形斜紋石④破片			28		
68	H-8	石製品	勾玉①1.8×1.2×0.6cm②4.5g③光形斜紋石			1		
69	H-8	甕	[17.5] (22.5)	①細粒②良好③明赤褐色④2/3	外面部削り。内面横ナゲ、ナゲ。	34ほか		
70	H-8	甕	[16.5] (12.5)	①中粒②良好③焼④口縁一部1/3	外面部ナゲ、裏磨り。内面横ナゲ、ナゲ。	50ほか		
71	H-9	甕	[10.6] (4.5)	①中粒②良好③によい焼④破片	内外面とも横ナゲ。	220		
72	H-9	甕	[10.0] (5.7)	①中粒②良好③明赤褐色④破片	外面部ナゲ、裏磨き。内面横ナゲ。	去探		
73	H-9	甕	[10.2] 7.5	①細粒②良好③焼④1/3	外面部刷毛目、ナゲ。内面横ナゲ。	115ほか		
74	H-9	台付甕	11.0 (15.5)	①細粒②良好③黄褐色④脚欠損	内外面とも横ナゲ、刷毛目。	309ほか		
75	H-9	甕	[12.5] (5.3)	①細粒②良好③焼④1/4	内外面とも横ナゲ。	267ほか		
76	H-9	甕	[12.0] 4.9	①細粒②良好③焼④1/4	内外面とも横ナゲ、ナゲ、裏磨き。	773ほか		
77	H-9	杯	[14.0] (4.8)	①細粒②良好③焼④1/3	外面部ナゲ、裏削り。内面横ナゲ、ナゲ、暗紋	221ほか		
78	H-9	杯	[14.6] (5.0)	①中粒②良好③明赤褐色④破片(口縁)	外面部ナゲ、ナゲ、削き。内面横ナゲ。	132ほか		
79	H-9	杯	[12.6] (4.0)	①細粒②良好③明赤褐色④1/5	外面部ナゲ、ナゲ、削き。内面横ナゲ。	695ほか		
80	H-9	杯	[15.2] (5.5)	①中粒②良好③明赤褐色④破片1/5	外面部ナゲ、ナゲ、削り。内横ナゲ、ナゲ。	351ほか		
81	H-9	甕	14.1 13.4	①中粒②良好③によい焼④2/3	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	175ほか		
82	H-9	高所	-- (11.2)	①細粒②良好③焼④脚部	外面部ナゲ、指印さえ。内面ナゲ。	152ほか		
83	H-9	甕	-- (12.5)	①中粒②良好③焼④底部	内外面とも裏磨き、ナゲ、刷毛目。	421ほか		
84	H-9	甕	[12.0] (5.9)	①細粒②良好③焼④口縁破片	外面部ナゲ、ナゲ、裏磨き。内面横ナゲ。	850		
85	H-9	甕	[11.6] (5.6)	①中粒②良好③焼④1/6	内外面とも横ナゲ。	839ほか		
86	H-10	甕	12.6 (7.6)	①細粒②良好③によい焼④口縁部のみ	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	321		
87	H-10	杯	[17.7] (4.0)	①中粒②良好③焼④破片	外面部ナゲ、ナゲ、裏磨き。内面横ナゲ。	202ほか		
88	H-10	甕	9.7 (8.7)	①中粒②良好③焼④口へり1/2	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	333ほか		
89	H-10	甕	10.4 (7.5)	①細粒②良好③明赤褐色④口縁部のみ	内外面とも横ナゲ、ナゲ、削き。	304ほか		
90	H-10	甕	[11.0] (5.5)	①細粒②良好③黄褐色④1/5	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	212		
91	H-10	杯	[14.0] (7.4)	①中粒②良好③焼④1/3	外面部ナゲ、ナゲ。内面磨き。	311ほか		
92	H-10	甕	[19.5] (16.0)	①細粒②良好③明赤褐色④口縁1/3	内外面とも横ナゲ、ナゲ。	341ほか		
93	J-1	石器	磨石①11.0×12.0×7.4cm②4400.0g③完形④粗粒安山岩(光面使用)			215		
94	J-1	石器	磨石①12.0×16.7×7.0cm②4200.0g③完形④粗粒安山岩(2面使用)			335		
95	J-1	石器	凹石①10.0×6.7×3.5cm②3.2kg③完形④粗粒安山岩(2面使用)			288		

番	出土位置	器 形	大きさ 口徑 高さ	①胎 土 ②焼成 ③色 膜 ④残存			器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
				⑤表面	⑥裏面	⑦裏面			
96	J-1	石器	凹石①9.6②7.8③6.9④450.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(4面使用)					243	
97	H-1	石器	磨石①8.5②6.6③5.5④360.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(全面使用)J-1より深入。					452	
98	H-1	石器	凹石①11.2②8.6③6.8④700.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(2面使用)						覆土
99	H-2	石器	磨石①11.7②9.2③7.6④600.0g⑤光形⑥粗粒安山岩						覆土
100	H-2	石器	台石・底石①20.1②15.1③6.9④3050.0g⑤焼によるハジケ⑥頁岩(台石は2面使用)					19	
101	H-2	石器	砾石・磨石①22.6②10.1③4.3④4600.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(2面使用)						覆土
102	H-4	石器	磨石①10.4②7.8③5.2④750.0g⑤光形⑥安山岩(全面使用)					98	
103	H-4	石器	磨石①9.4②6.9③3.9④490.0g⑤光形⑥頁岩(先端使用)					172	
104	H-5	石器	椭圆石①12.9②5.9③4.4④24460.0g⑤光形⑥安山岩					A	
105	H-5	石器	椭圆石①15.1②6.4③4.0④300.0g⑤光形⑥火山岩					B	
106	H-5	石器	椭圆石①14.9②7.4③4.3④630.0g⑤光形⑥頁岩					C	
107	H-6	石器	砾石①11.3②11.0③5.6④470.0g⑤光形⑥砾石(2面使用)					269	
108	H-6	石器	磨石①9.3②7.0③6.0④500.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(2カ所使用)					142	
109	H-6	石器	砾石①14.0②6.7③6.3④610.0g⑤光形⑥粗粒安山岩(4カ所使用)					102	
110	H-6	石器	砾石①12.6②11.5③7.2④3100.0g⑤一部欠損⑥粗粒安山岩(2面使用)					659	
111	H-7	石器	砾石①16.7②10.6③9.1④1520.0g⑤一部欠損⑥粗粒安山岩(4面使用・先端使用)					609	
112	H-7	石器	砾石①7.3②7.2③4.5④100.0g⑤光形⑥砾石(断面と砾石、砾石2面使用)					812	
113	H-7	石器	砾石①13.0②6.9③1.2④120.0g⑤光形⑥砂岩(2面使用・側面研磨)					663	
114	H-7	石器	砾石①9.6②11.3③5.2④60.0g⑤一部欠損⑥安山岩(縄文時代の練習の転用品か)					661	
115	X16-X36	石器	凹石・磨石①12.1②7.8③3.6④550.0g⑤一部欠損⑥粗粒安山岩(凹み2面使用)						覆土

注) 1. 縄文土器の観察項目は、①胎土②焼成③色調④残存⑤文様・整形方法の順で記載した。

2. 玉・土製品・石器・石製品の観察項目は、①最大周②最大幅③最大厚④重さ⑤複数⑥石器の順で記載した。

3. ①胎土は繊維(0.5mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合には鉱物名を記載。

②焼成は良・良好・不良の3段階評価。

③色調は土器外表面を観察し、色名は新日本標準土色鉛(小山・竹原1976)によった。

④大きさの単位はcm、gであり、粗存値を( )、復元値[ ]で示した。その他の小片については所持部位を記載した。

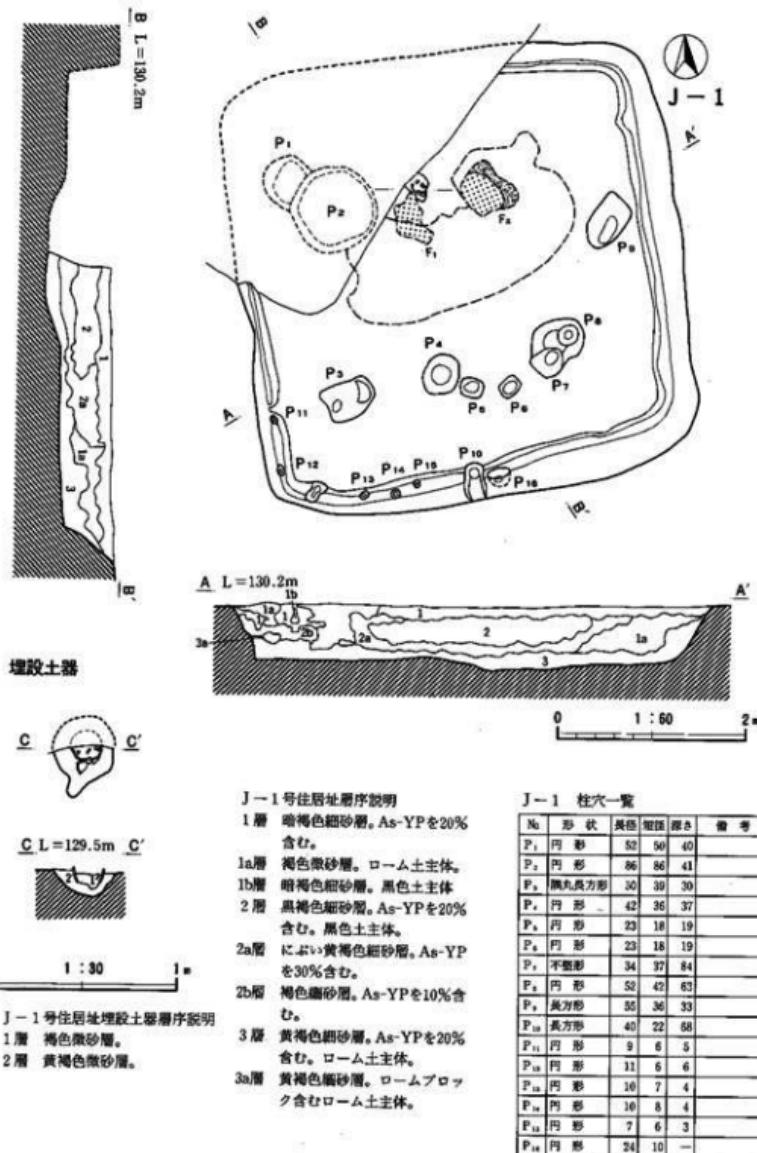
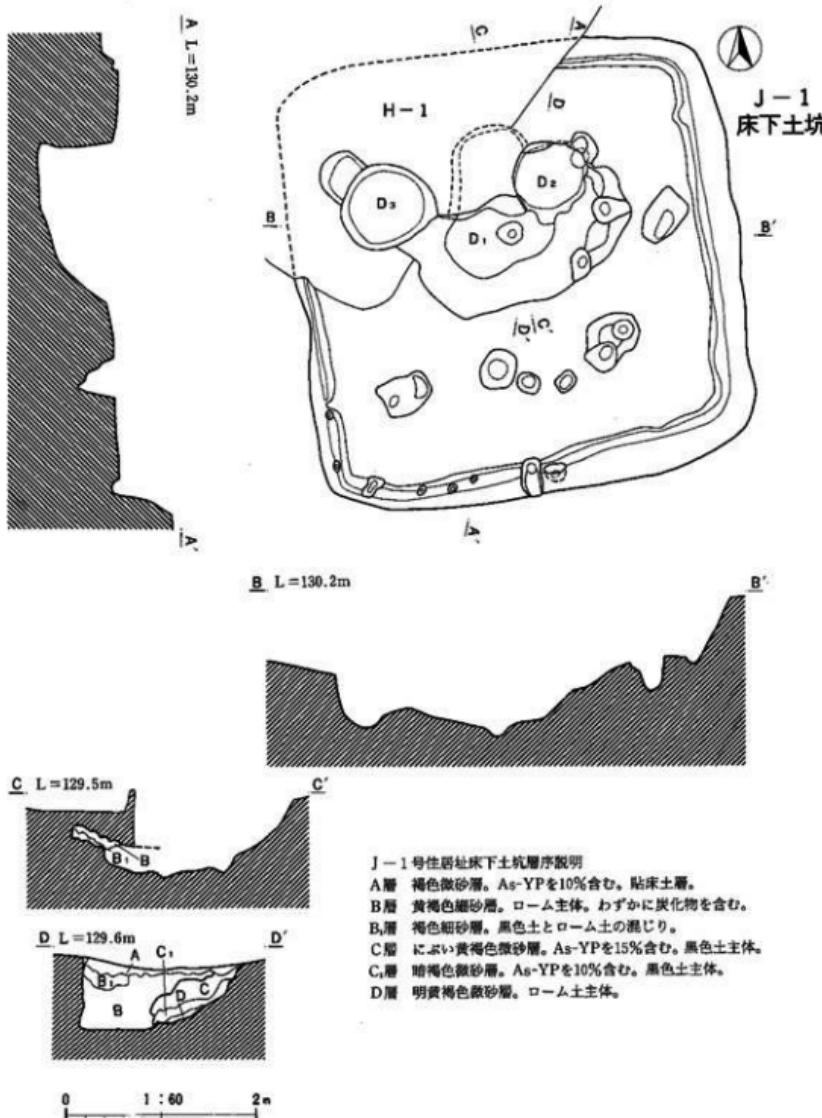


Fig. 7 J-1号住居址



**J-1号住居址床下土坑層序説明**  
 A層 褐色微砂層。As-YPを10%含む。粘土土層。  
 B層 黄褐色細砂層。ローム主体。わずかに炭化物を含む。  
 C層 褐色細砂層。黒色土とローム土の混じり。  
 C<sub>1</sub>層 にぶい黄褐色微砂層。As-YPを15%含む。黒色土主体。  
 C<sub>2</sub>層 暗褐色微砂層。As-YPを10%含む。黒色土主体。  
 D層 明黄褐色微砂層。ローム土主体。

Fig. 8 J-1号住居址

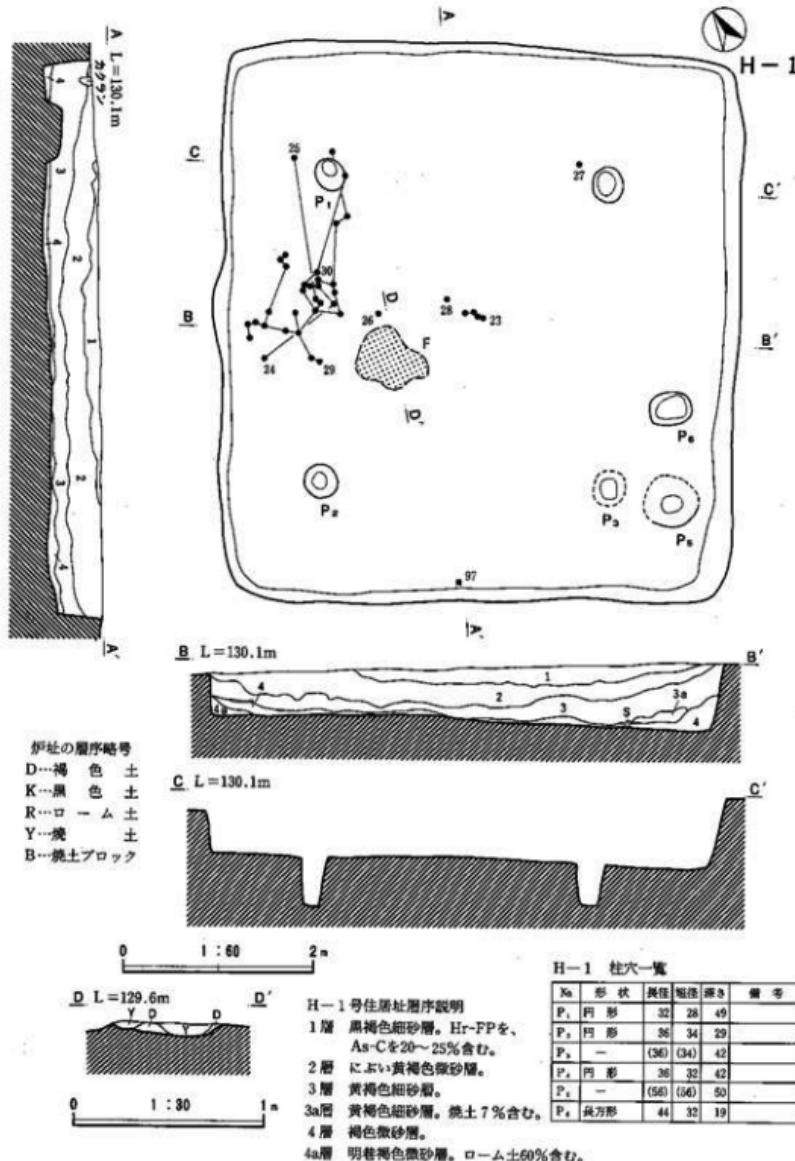


Fig. 9 H-1号住居址

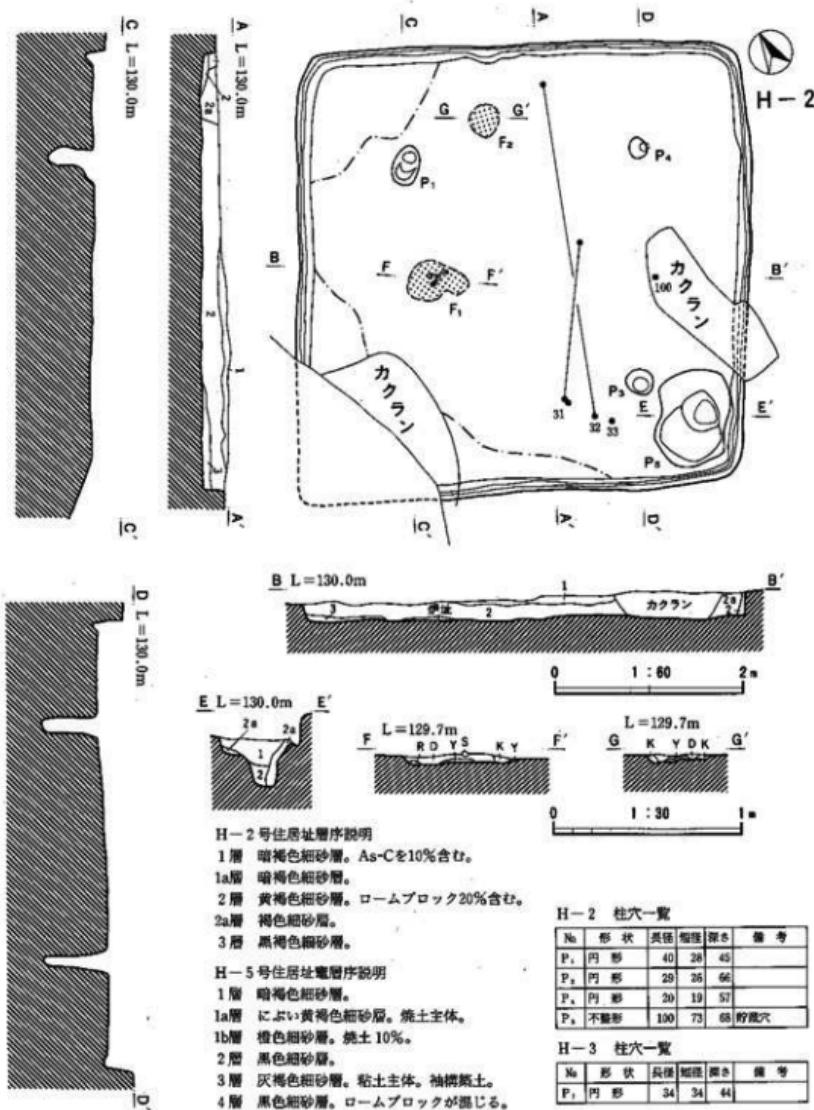


Fig. 10 H-2号住居址

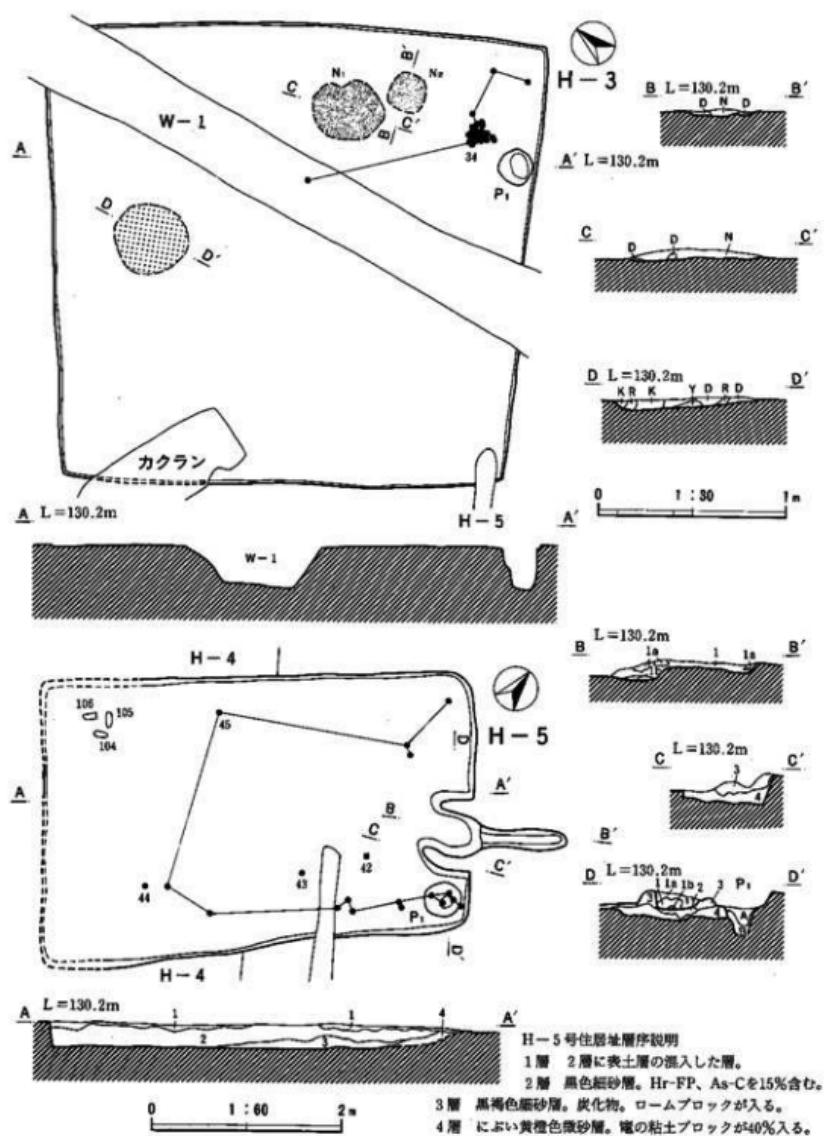


Fig. 11 H-3 + 5号住居址

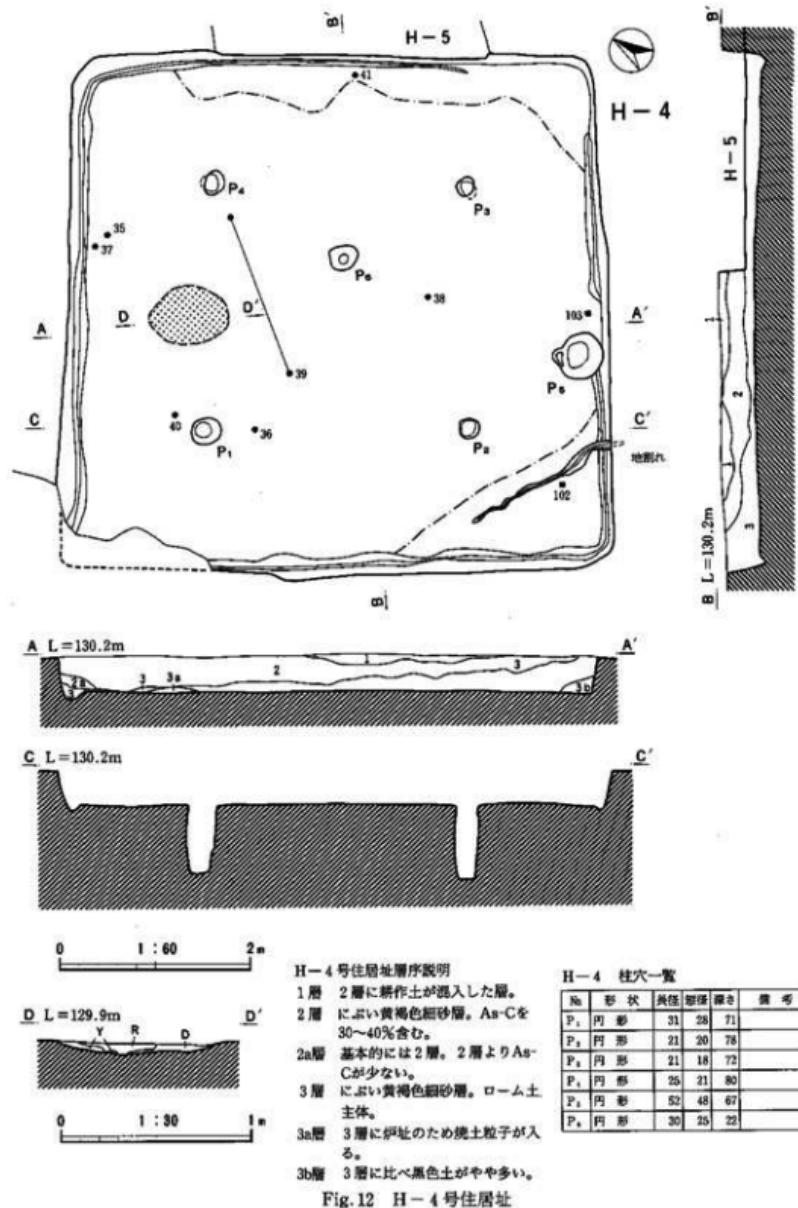
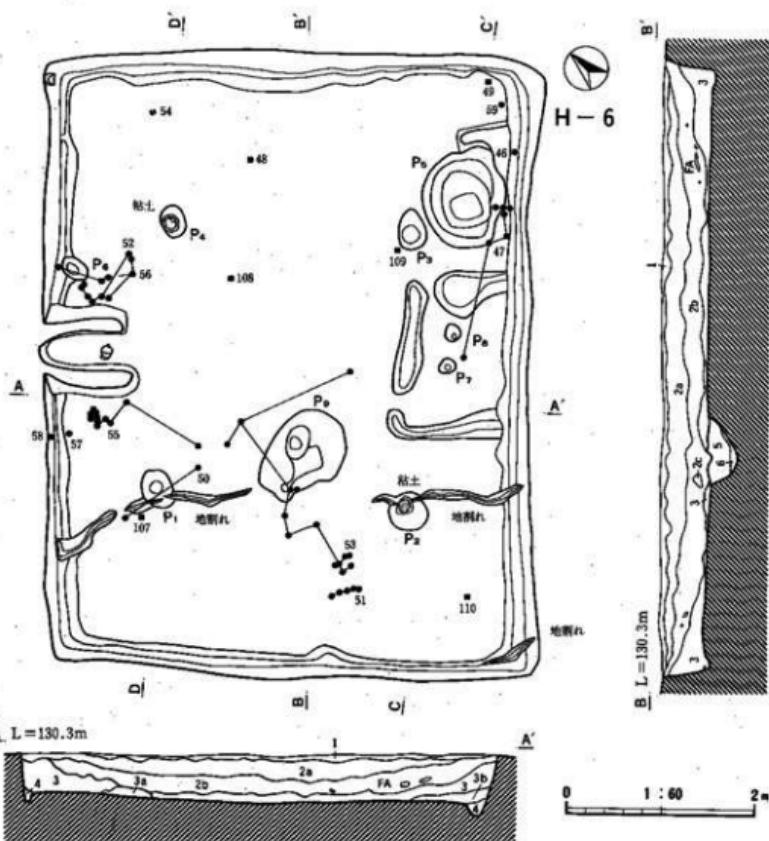


Fig. 12 H-4号住居址



#### H-6号住居址層序説明

- 1層 黒色細砂層。As-Bを40%含む。  
 2a層 黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを15%含む。  
 2b層 褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを15%含む。  
 Hr-FAがブロック状に入る。  
 3層 黄褐色細砂層。ローム粒子を25%含む。  
 3a層 橙色微砂層。ローム、泥土。  
 3b層 黄褐色微砂層。  
 4層 明黄褐色微砂層。  
 5層 明黄褐色微砂層。ローム土を60%含む。  
 6層 黄褐色微砂層。

#### H-5・柱穴一覧

No.	形 状	長 度	幅 度	深 さ	備 考
P <sub>1</sub>	円 形	38	36	30	底に粘土

#### H-6・柱穴一覧

No.	形 状	長 度	幅 度	深 さ	備 考
P <sub>1</sub>	円 形	40	33	91	
P <sub>2</sub>	円 形	41	40	73	底に粘土
P <sub>3</sub>	円 形	42	30	74	
P <sub>4</sub>	円 形	33	24	75	底に粘土
P <sub>5</sub>	円 形	106	71	79	
P <sub>6</sub>	円 形	27	23	15	
P <sub>7</sub>	円 形	19	16	23	
P <sub>8</sub>	円 形	19	16	30	
P <sub>9</sub>	円 形	100	75	39	床下土坑

Fig.13 H-6号住居址

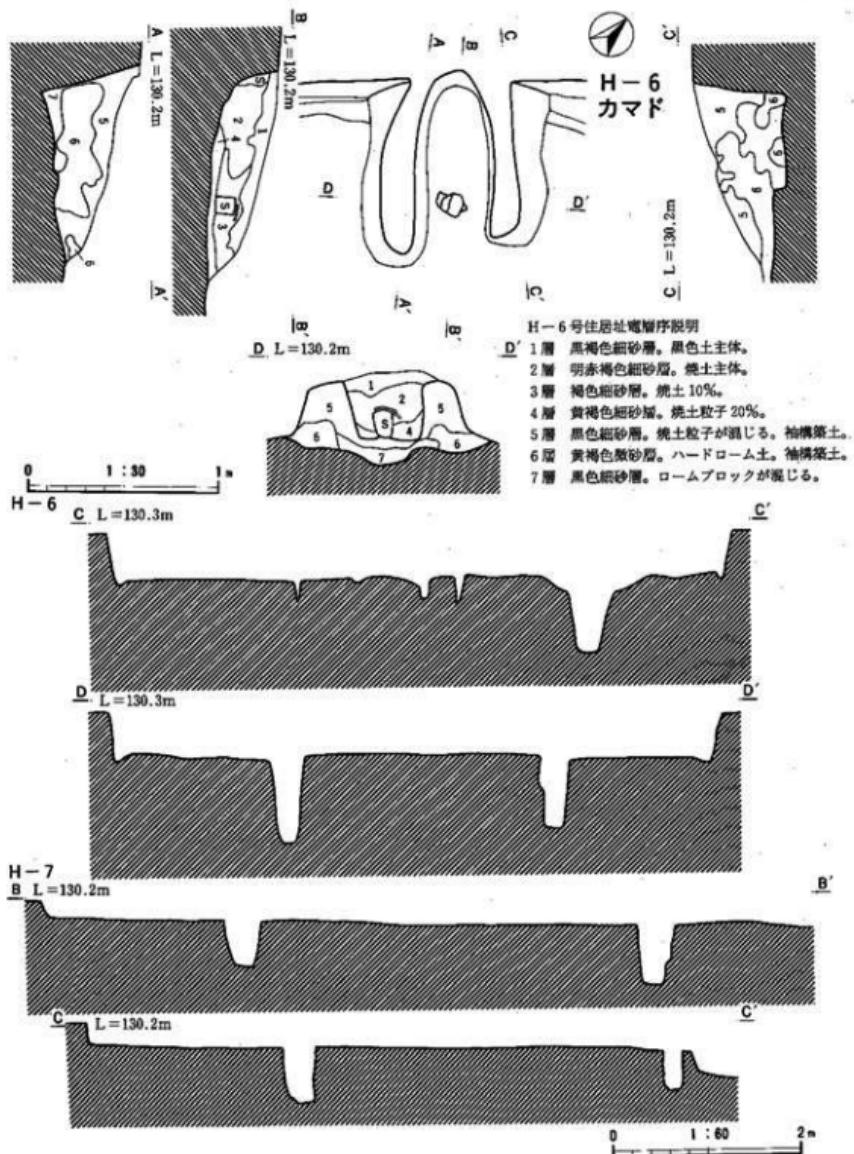
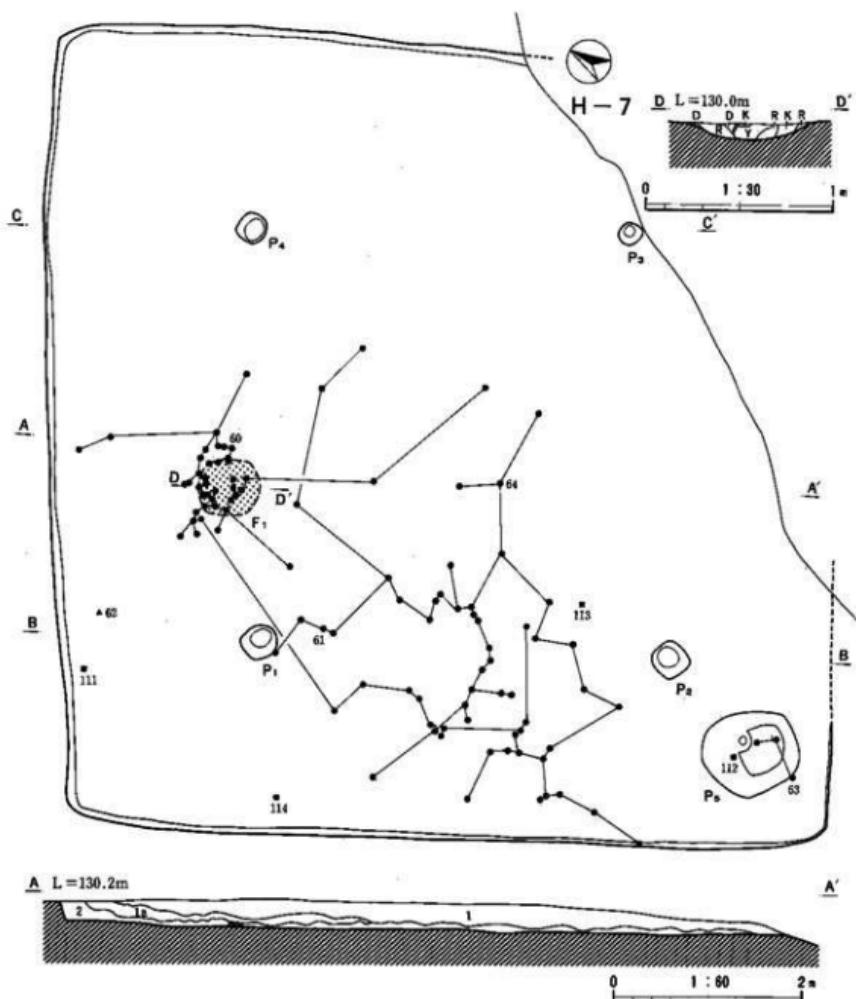


Fig. 14 H-6・7号住居址



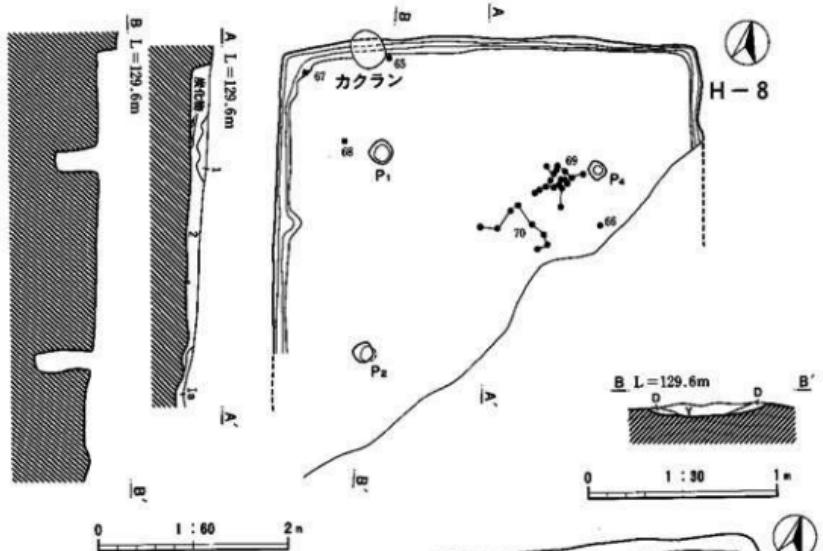
H-7号住居址層序説明

1層 黒褐色細砂層。  
la層 棕褐色細砂層。炭化材を含む。  
2層 黄褐色細砂層。

H-7 柱穴一覧

No.	形 状	長 度	直径	深 度	備 考
P <sub>1</sub>	円 形	36	36	47	
P <sub>2</sub>	円 形	37	33	69	
P <sub>3</sub>	円 形	25	23	49	
P <sub>4</sub>	円 形	31	30	57	
P <sub>5</sub>	円 形	103	88	51	柱穴

Fig. 15 H-7号住居址



#### H-8 穴一覧

No	形狀	長径	短径	深さ	備考
P <sub>1</sub>	円 形	25	24	43	
P <sub>2</sub>	円 形	22	21	64	
P <sub>3</sub>	円 形	20	19	49	

#### H-9 柱穴一覧

No	形狀	長径	短径	深さ	備考
P <sub>1</sub>	円 形	32	26	23	
P <sub>2</sub>	円 形	22	19	23	
P <sub>3</sub>	円 形	32	30	25	
P <sub>4</sub>	円 形	51	43	22	
P <sub>5</sub>	円 形	31	30	23	

#### H-8 住居址層序説明

- 1層 黒褐色微砂層。
- 1a層 暗褐色細砂層。
- 2層 黄褐色微砂層。炭化物を含む。

#### H-9 住居址層序説明

- 1層 黑褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを10%含む。
- 2層 黑色細砂層。黑色土主体。
- 3層 によい黄褐色微砂層。ローム土主体。
- 3a層 黄褐色微砂層。

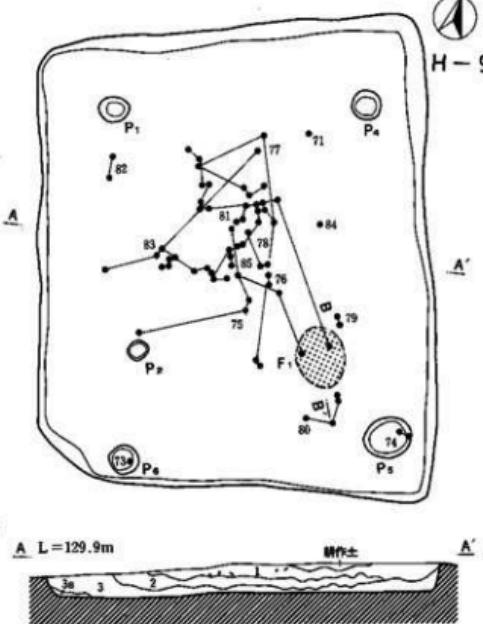
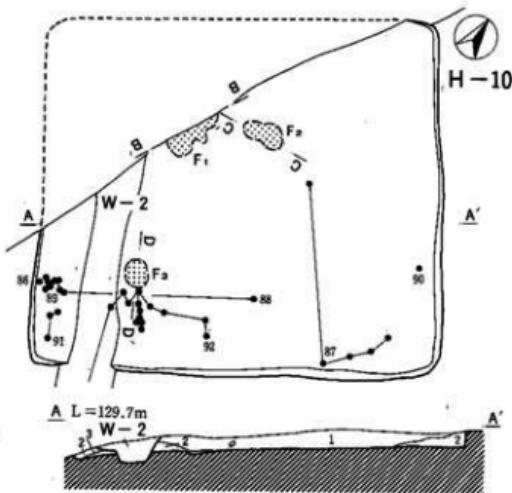
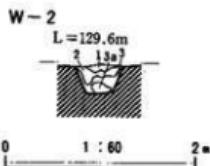
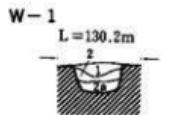
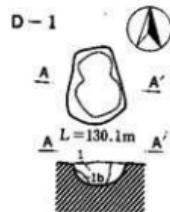
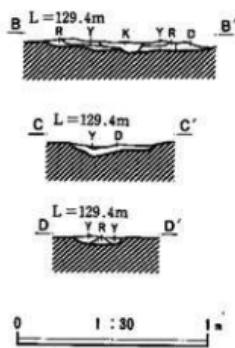


Fig. 16 H-8 + 9号住居址



#### H-10号住居址層序説明

- 1層 暗褐色微砂層。Hr-FP、As-Cを40%含む。
- 2層 黒褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを10%含む。
- 3層 黄褐色微砂層。ローム土主体。

#### D-1号土坑層序説明

- 1層 暗褐色細砂層。黒色土主体
- 1a層 褐色細砂層。黒色もローム土の混じり。
- 1b層 褐色細砂層。ロームブロックを10%含む。

#### W-1号溝層序説明

- 1層 黑褐色細砂層。Hr-FP、As-Cを30%含む。
- 2層 暗褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。
- 2a層 褐色細砂層。ロームブロックを10%含む。

#### W-2号溝層序説明

- 1層 暗褐色細砂層。ローム土主体。
- 2層 黑褐色細砂層。黒色土主体。
- 3層 褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。
- 3a層 黄褐色細砂層。ロームブロック含む、黒色土とローム土の混じり。

Fig. 17 H-10号住居址、W-1・2号溝、D-1号土坑

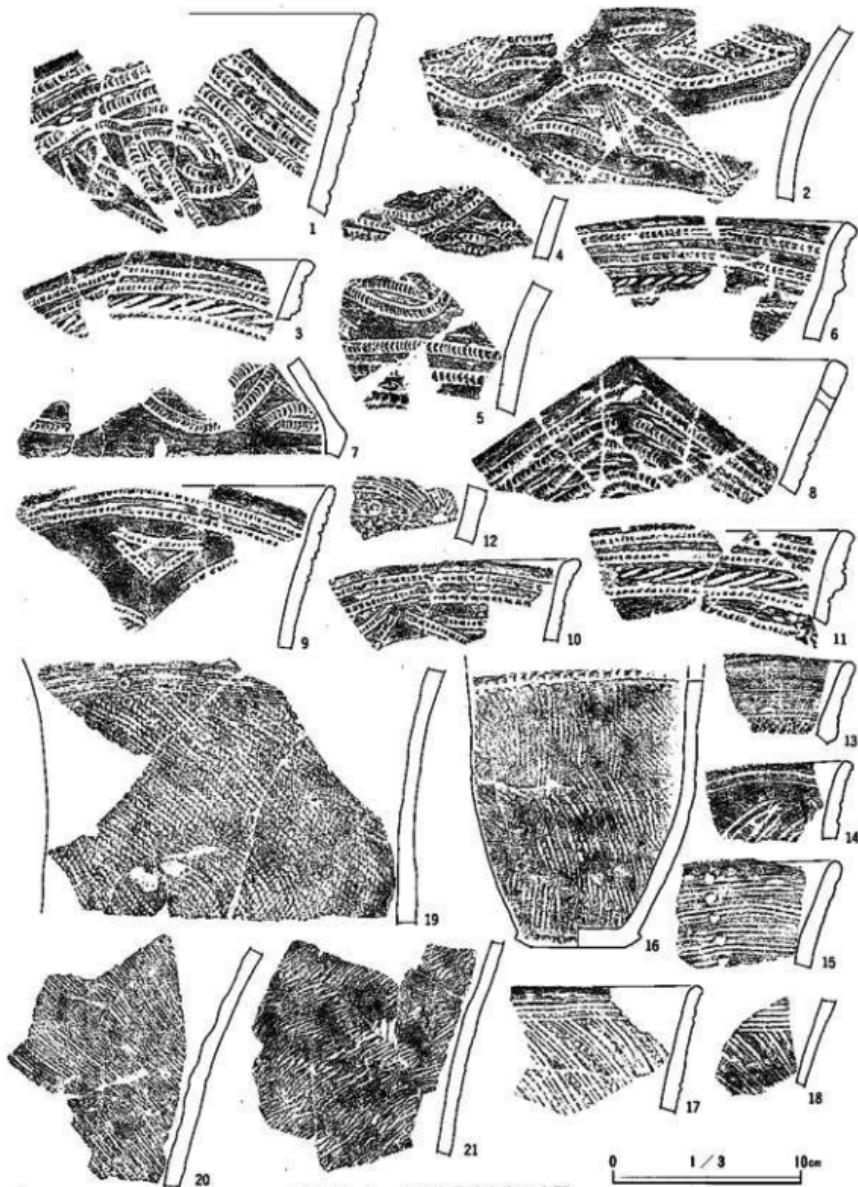


Fig. 18 J-1号住居址出土の土器

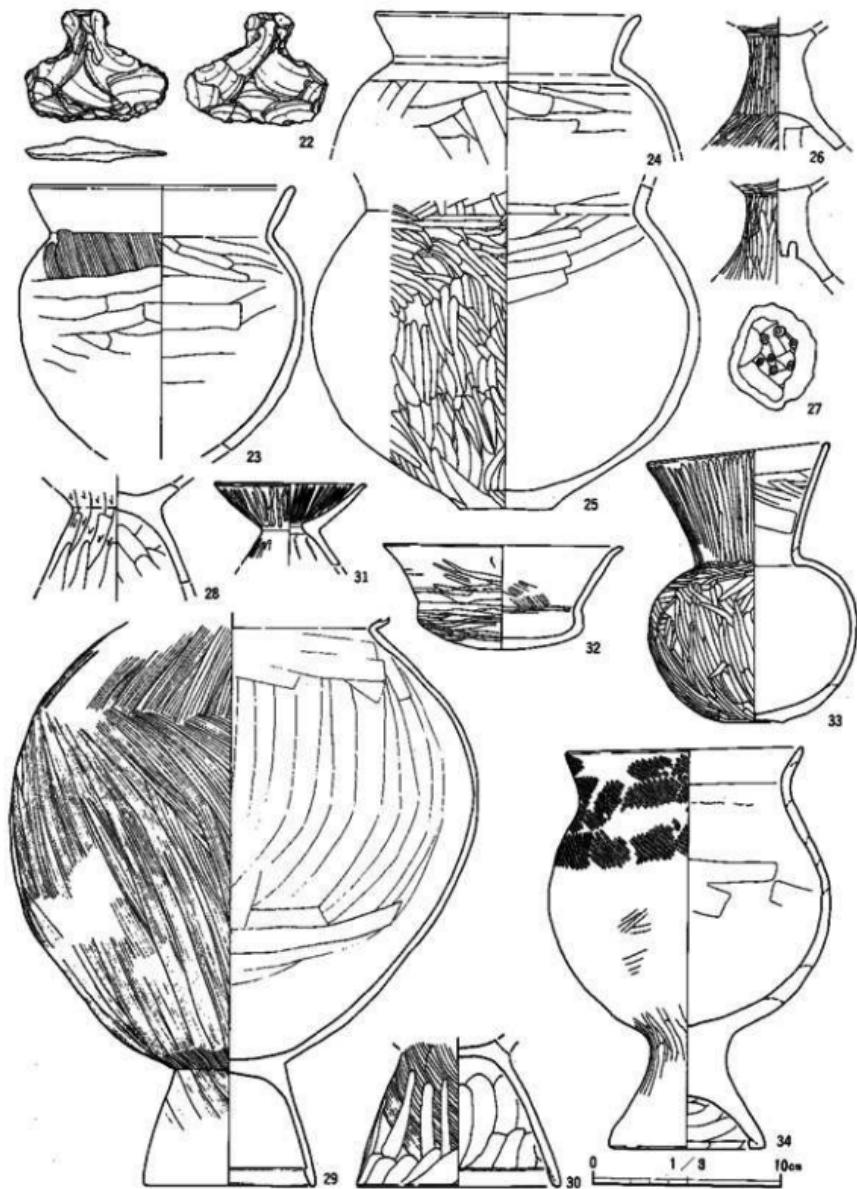
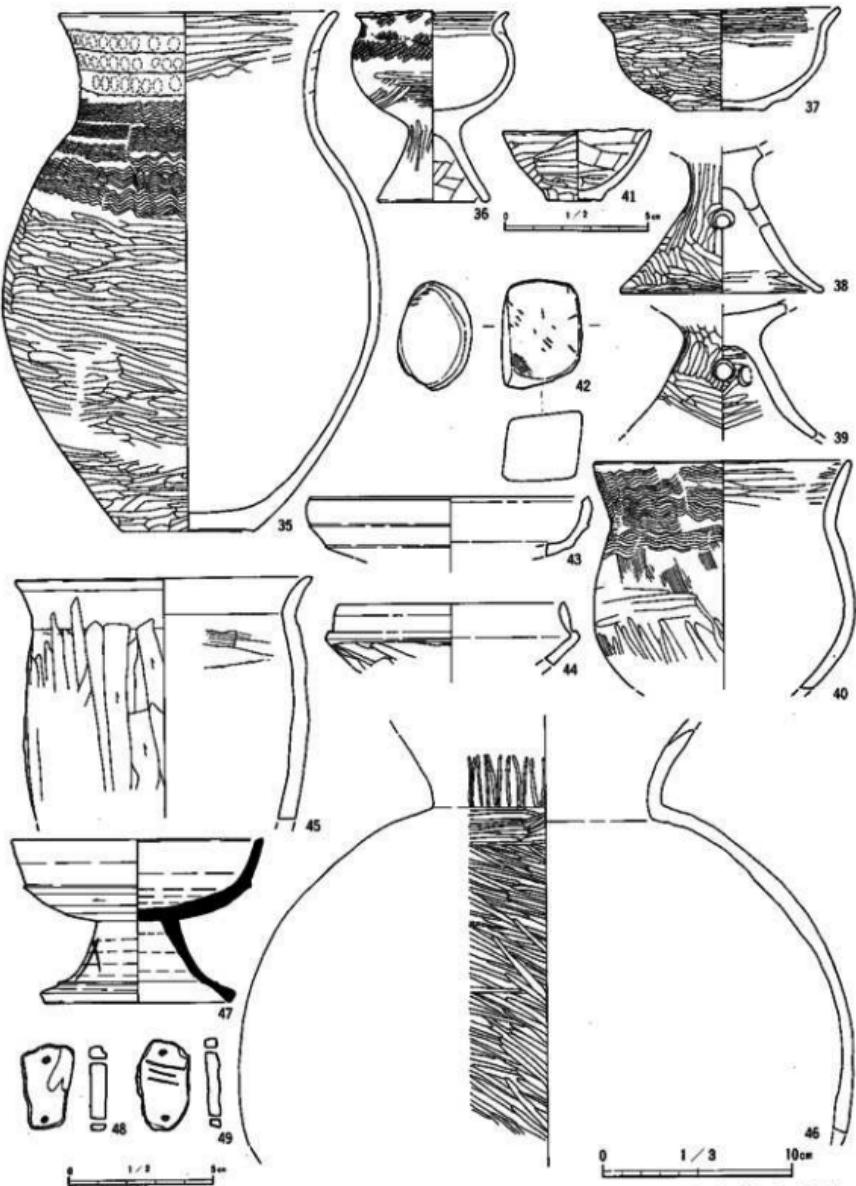


Fig. 19 J-1・H-1~3号住居址出土の土器



H-4…35～41、H-5…42～45、H-6…46～49

Fig. 20 H-4～6号住居址出土の土器

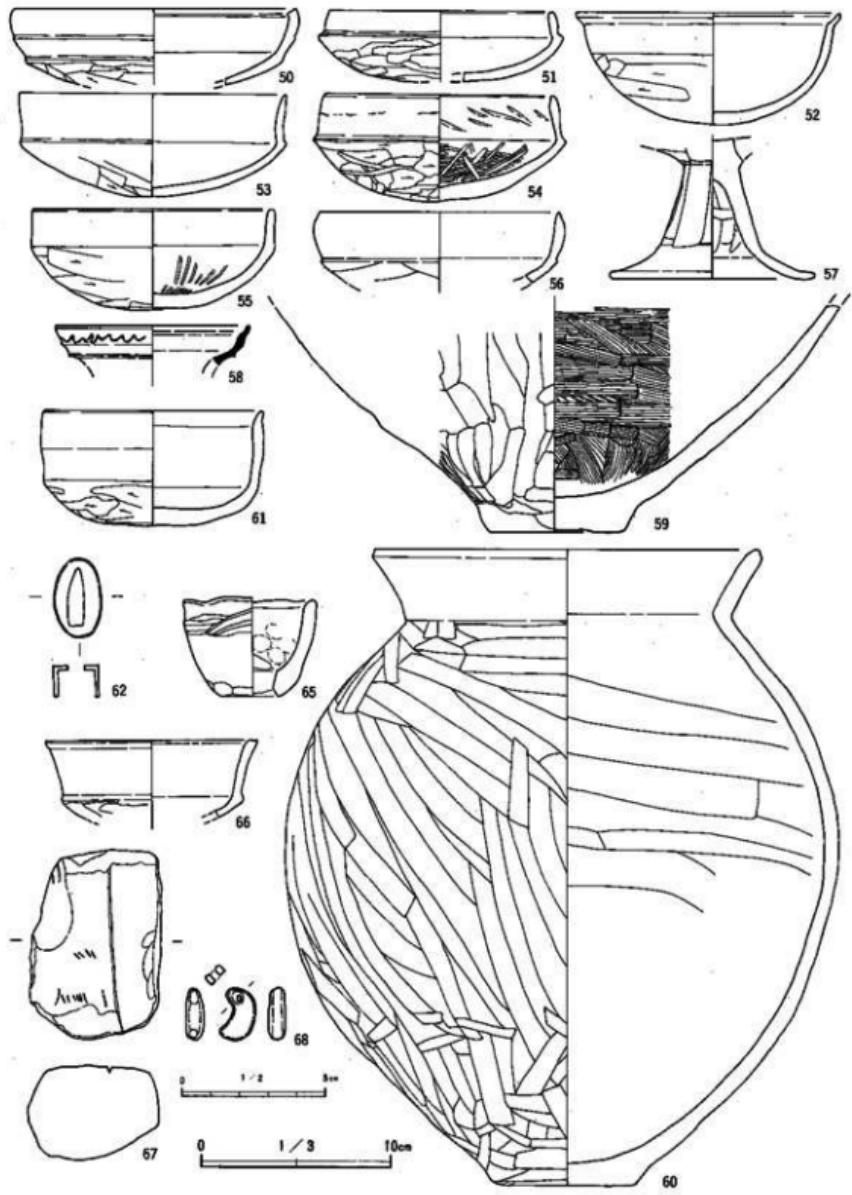


Fig. 21 H-6～8号住居址出土の土器

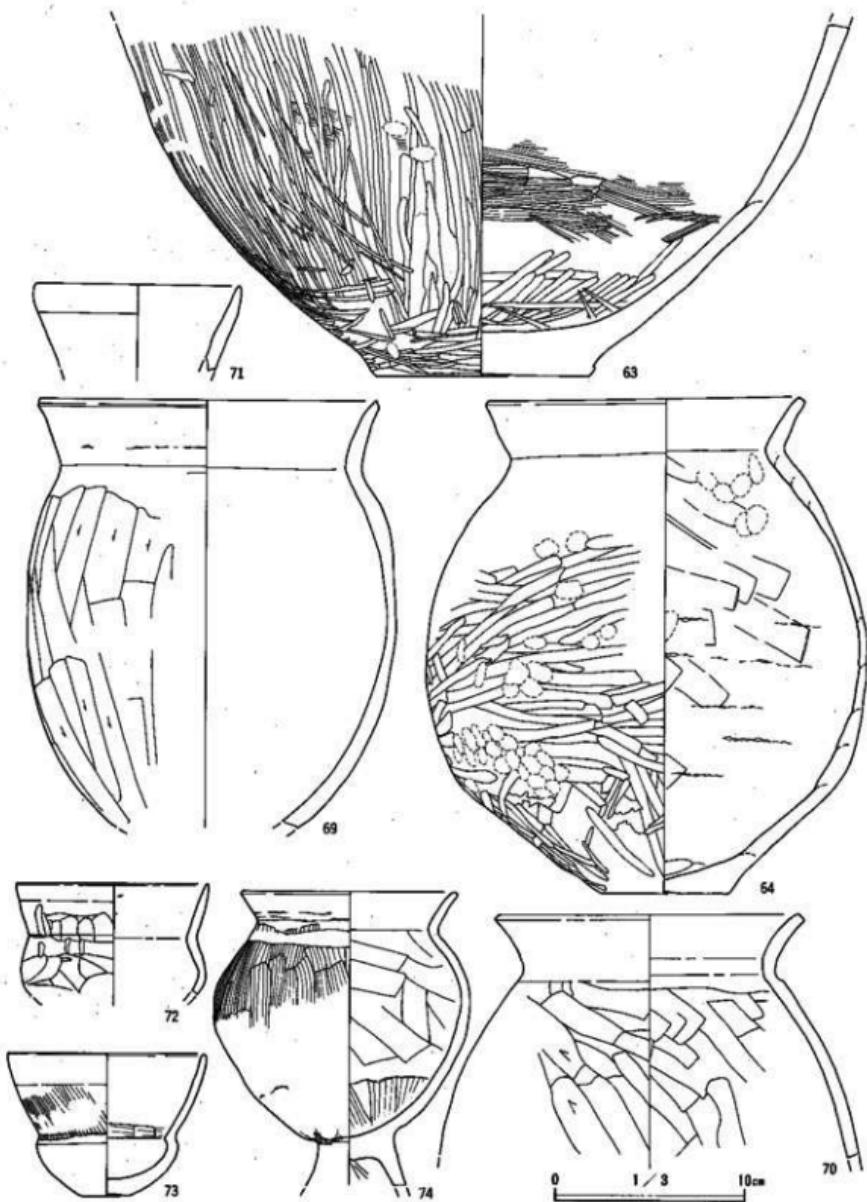


Fig. 22 H-7～9号住居址出土の土器

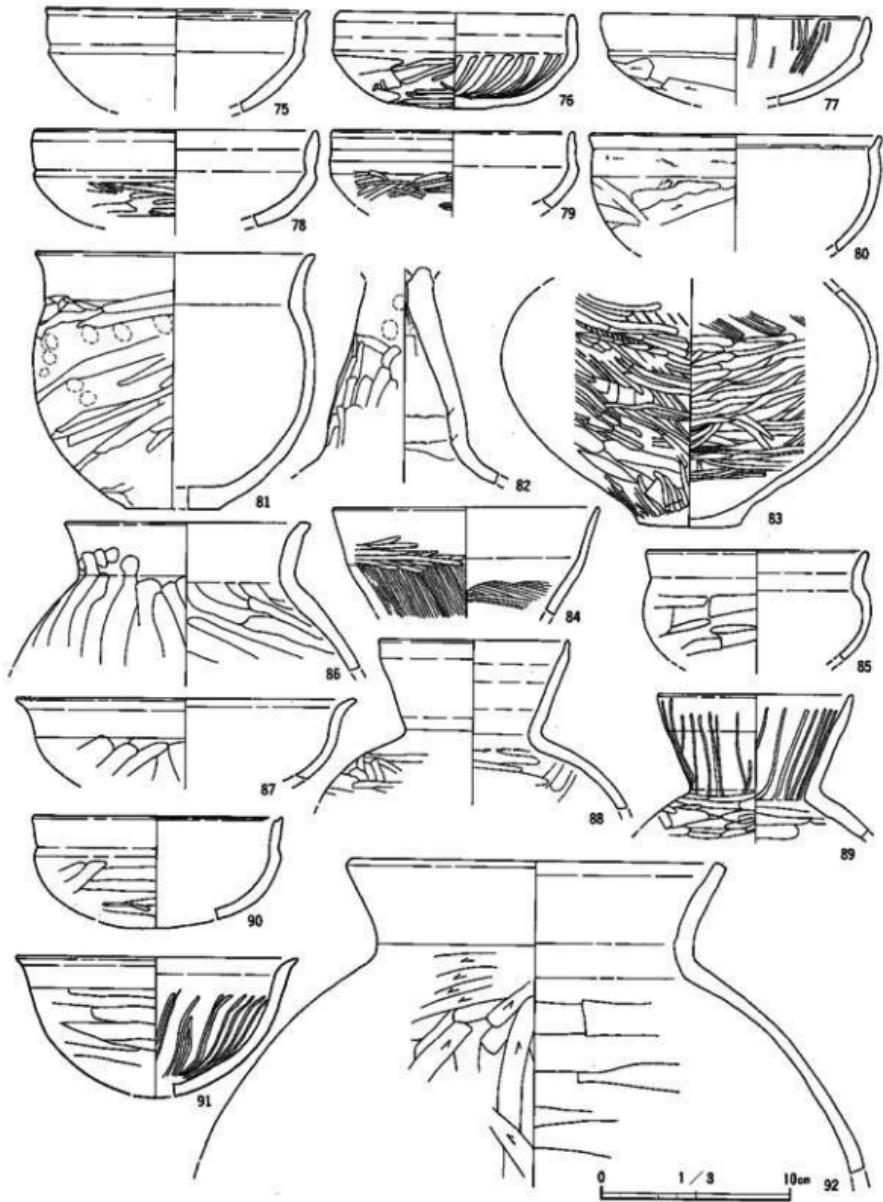


Fig. 23 H-9・10号住居址出土の土器

H-9-75~85, H-10-86~92

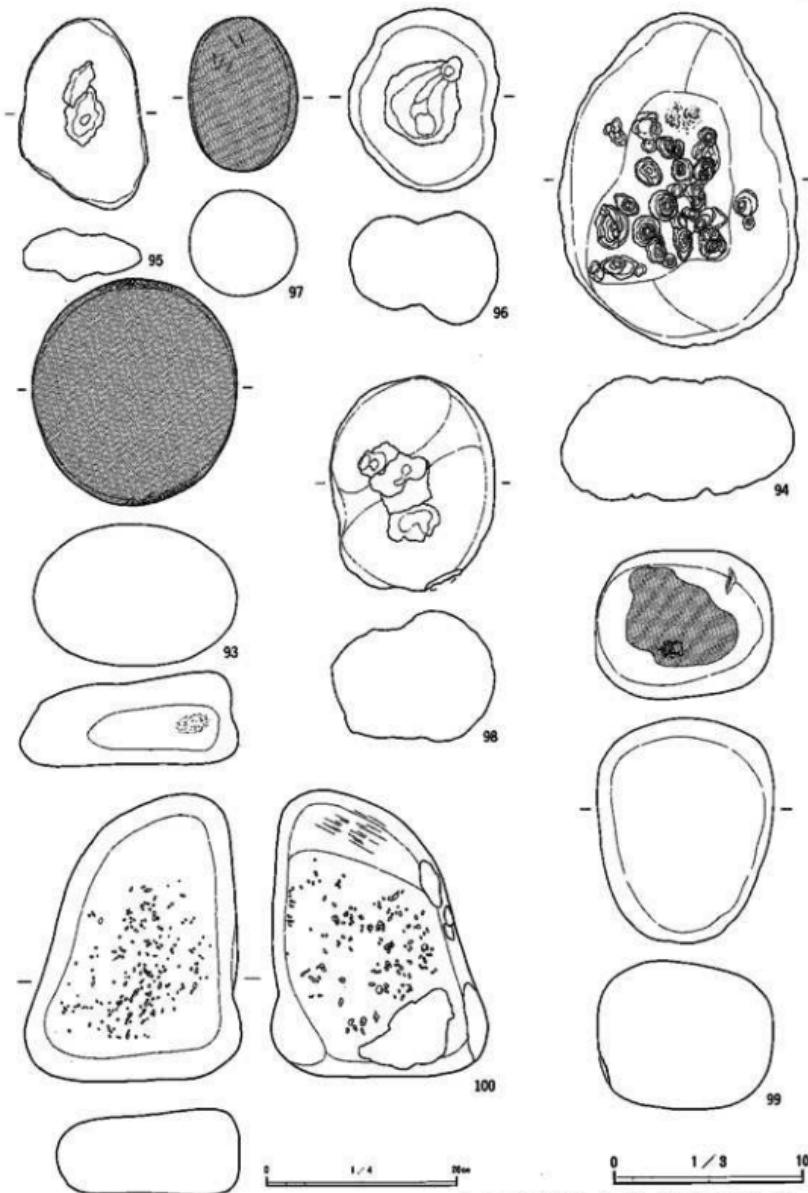
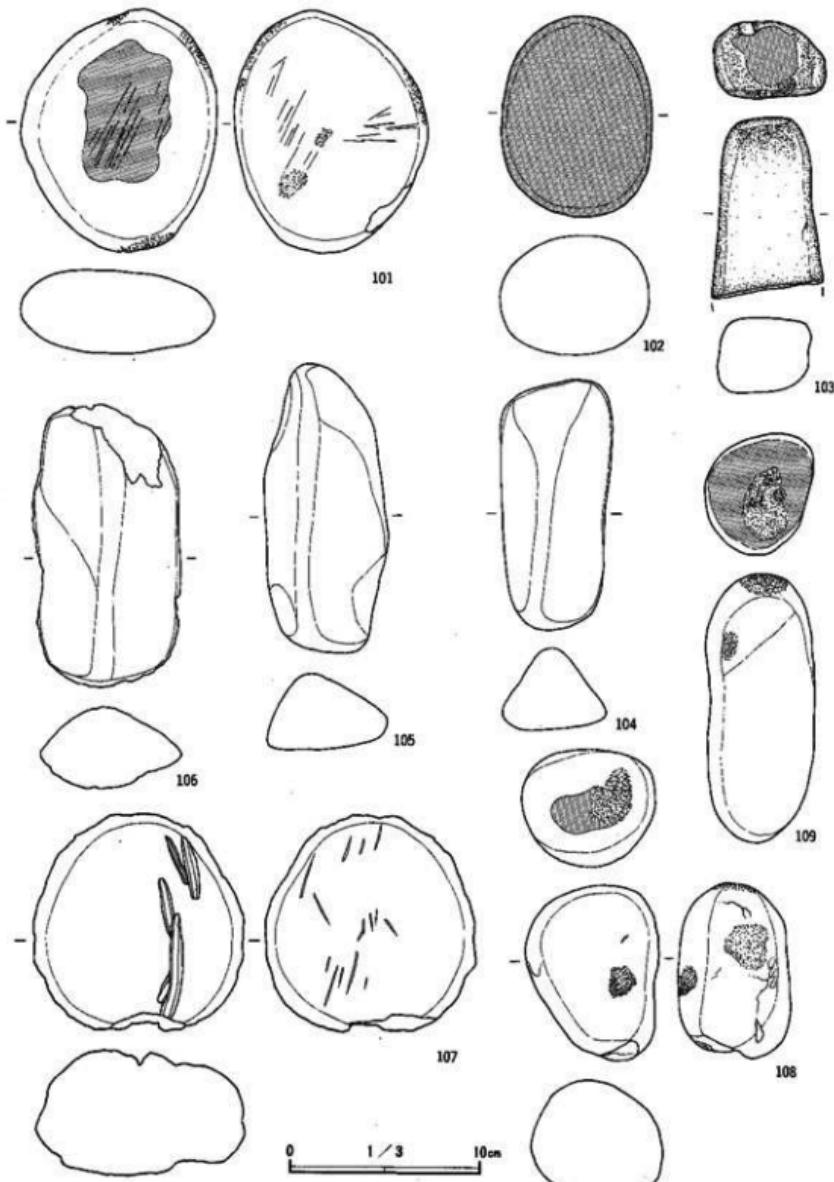


Fig. 24 J - 1 • H - 1 • 2号住居址出土の石器



H - 2 … 101、H - 4 … 102、103、H - 5 … 104~106、H - 6 … 107~109  
Fig. 25 H - 2 • 4 ~ 6号住居址出土の石器

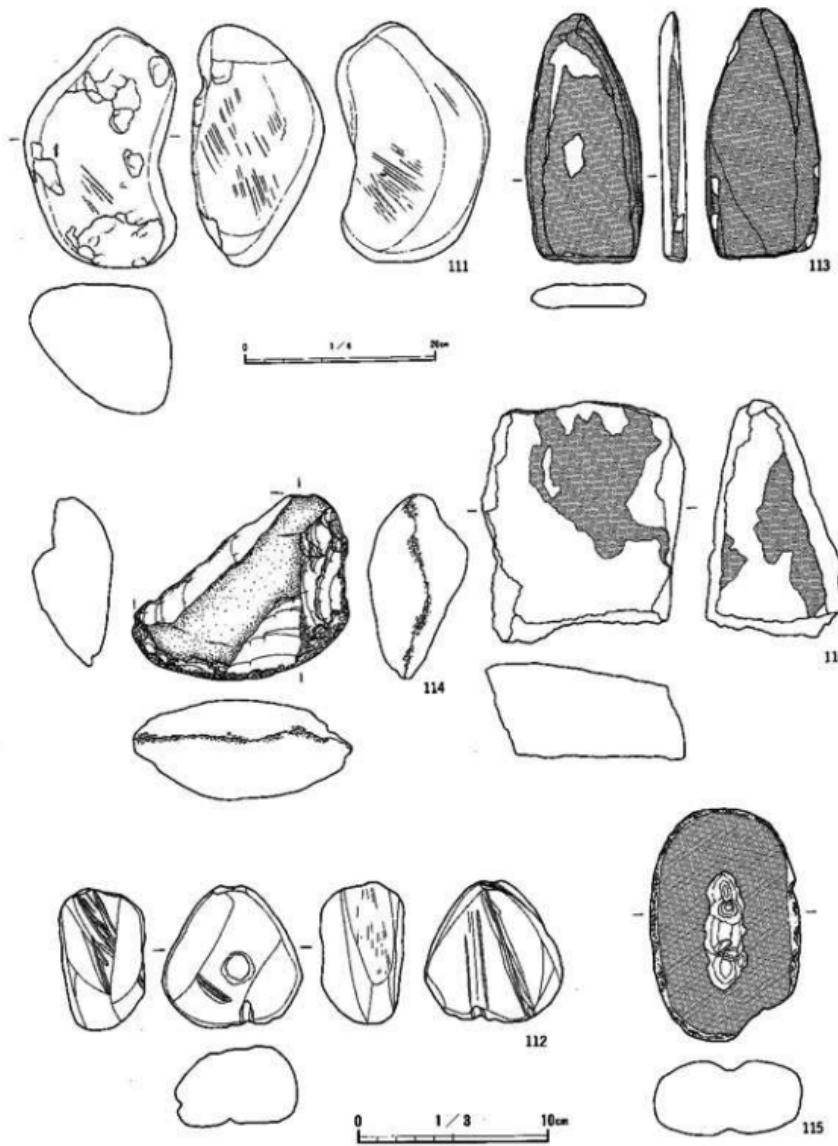


Fig. 26 H-6・7号住居址出土の石器・石製品





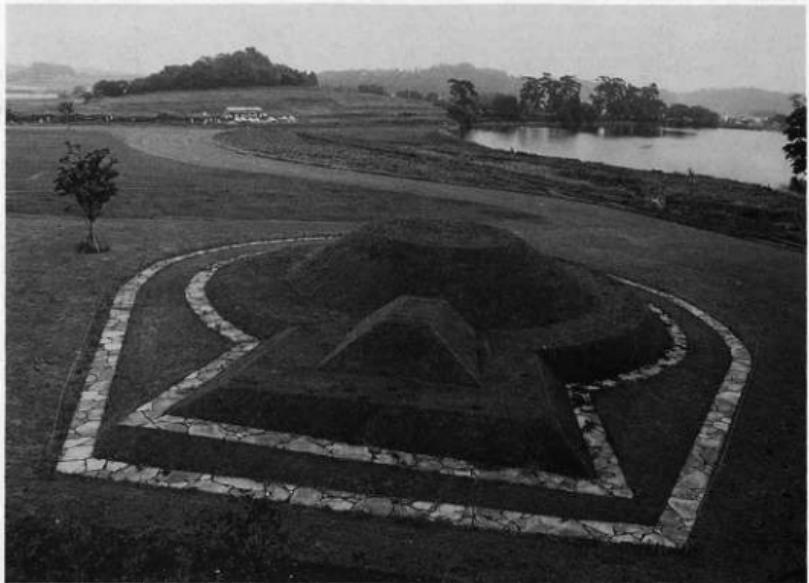
Plat 6 - 4th Quadrant (N.E. 1/4)



遺跡全景（真上から）



1. 平成6年度調査区と風のわたる丘（東から空撮）



2. 復原された内堀M-1号墳（北西から）



1. 調査区北側（南から）



2. J-1号住居址（東から）



1. J-1号住居址（南から）



2. J-1号住居址埋設土器セクション（西から）



3. J-1号住居址貯蔵穴（東から）



4. J-1号住居址貼り床セクション（南東から）



5. J-1号住居址貼り床セクション（南から）



6. J-1号住居址遺物出土状態（南から）



7. J-1号住居址遺物出土状態（北から）



8. H-1号住居址（北から）



1. H-1号住居址遺物出土状態（北東から）



2. H-2号住居址（南東から）



3. H-2号住居址遺物出土状態（南西から）



4. H-2号住居址遺物出土状態（南東から）



5. H-3号住居址（東から）



6. H-3号住居址とW-1号溝（北から）



7. H-4・5号住居址（東から）



8. H-4号住居址遺物出土状態（北から）



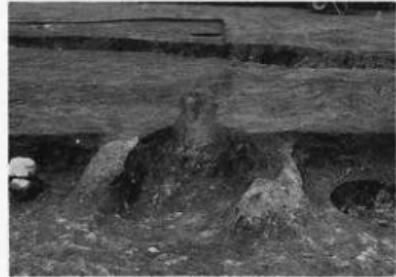
1. H-4号住居址出土石（北から）



2. H-5号住居址（西から）



3. H-4・5号住居址発掘調査風景（南から）



4. H-5号住居址の窯（南西から）



5. H-5号住居址砥石出土状態（南から）



1. H-6号住居址（南東から）



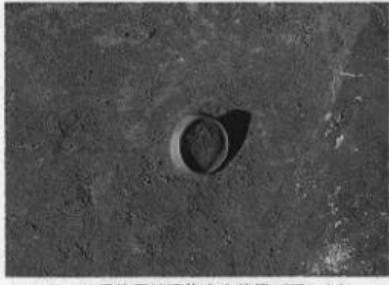
2. H-6号住居址発掘調査風景（南東から）



3. H-6号住居址の竈（南東から）



4. H-6号住居址遺物出土状態（北西から）



5. H-6号住居址遺物出土状態（西から）



1. H-6号住居址の壺（南東から）



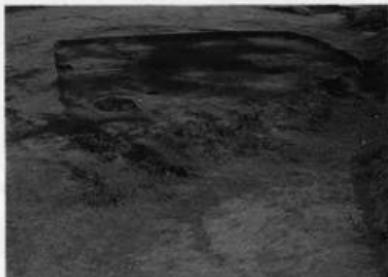
2. H-6号住居址遺物出土状態（北から）



3. H-6号住居址発掘調査風景（東から）



4. H-6号住居址遺物出土状態（北から）



5. H-7号住居址（南から）



1. H-7号住居址遺物出土状態（西から）



2. H-7号住居址遺物出土状態（西から）



3. H-7号住居址遺物出土状態（南西から）



4. H-8号住居址（南から）



5. H-8号住居址遺物出土状態（東から）



6. H-8号住居址遺物出土状態（北から）



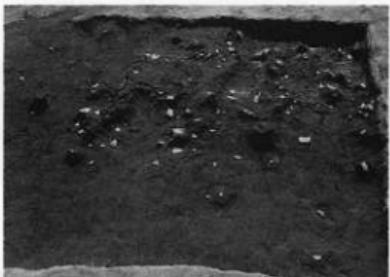
7. H-8号住居址遺物出土状態（西から）



8. H-9号住居址（北から）



1. H-9号住居址遺物出土状態（北から）



2. H-9号住居址遺物出土状態（東から）



3. H-10号住居址（北東から）



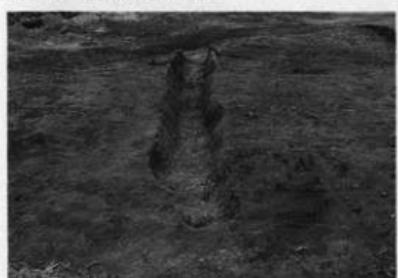
4. H-10号住居址遺物出土状態（北から）



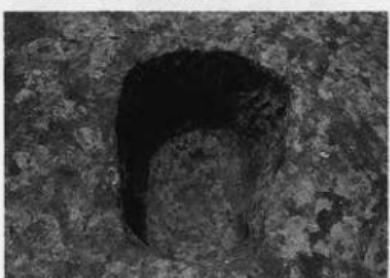
5. W-1号溝（北から）



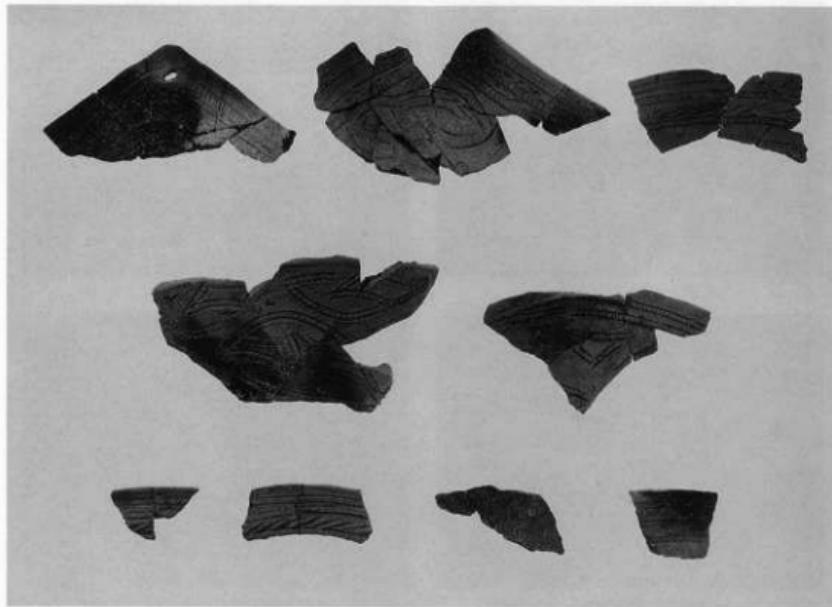
6. W-1号溝（西から）



7. W-2号溝（南東から）



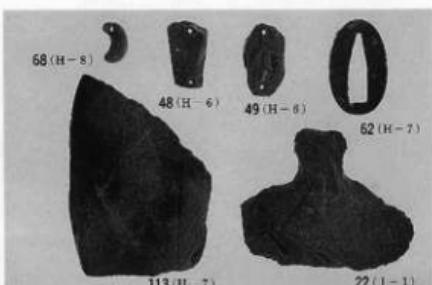
8. D-1号土坑（南から）



1. 繩文土器



2. 繩文土器



PL. 14



41 (H - 4)



39 (II - 4)



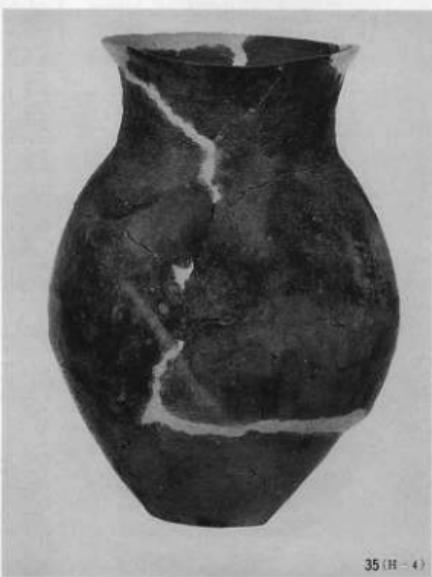
38 (II - 4)



36 (H - 4)



37 (II - 4)



35 (H - 4)



45 (H - 5)



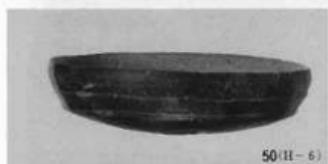
54 (H - 6)



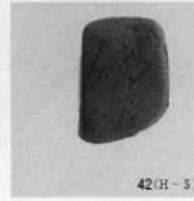
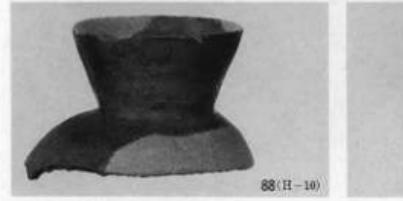
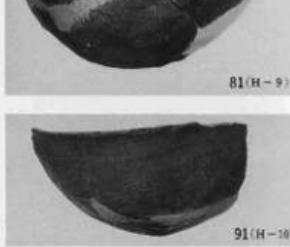
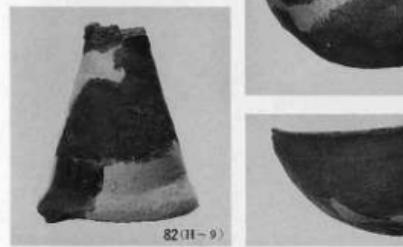
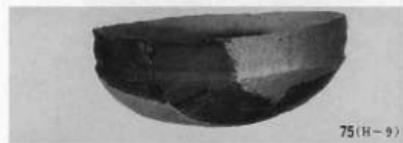
47 (H - 6)



52 (H - 6)



PL. 16



## 調査要項

遺跡名 称 内堀遺跡群下高引II遺跡  
遺跡記号 6E11  
遺跡所在地 群馬県前橋市西大室町2539番地  
調査期間 発掘調査 平成6年4月25日～平成6年7月29日  
遺物整理・報告書作成 平成7年2月20日～平成7年3月24日  
調査面積 1200m<sup>2</sup>  
開発面積 369000m<sup>2</sup>  
調査原因 公園造成  
調査主体者 前橋市教育委員会 教育長 岡本信正  
課長 本山 卓 文化財専門員 阿久津宗二  
埋蔵文化財係 係長 駒倉秀一 主査 関口 孝 國部守央 主任 井野誠一  
前原 量 伊藤 良 寺野吉弘 戸所慎策 新井真典  
坂口好幸 大山知久  
文化財保護係 係長 宮下 寛 主査 井野修二 主任 山口宗男  
真塩欣一 清藤仁志 林 信也

調査担当者 前原 量 戸所慎策  
調査参加者 石井春江 伊藤孝子 脇田智富 関野幾代 川島勝治 神沢方子  
木村源次郎 木村トヨ 木村はる子 久保もり子 佐藤佳子 佐野勝次郎  
関口みよ子 高橋弘志 高橋やすの 竹内り子 田中善四郎 角田正次郎  
富岡和子 内藤貴美子 内藤 孝 主代仲治 斎原和子 牧野せつよ  
吉田真理子 八木原きみ子 小保方豊五郎

調査協力 加部二生 小島純一 細野高伯 山下敬信 群馬県教育委員会文化財保護課  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 桐川村教育委員会 公園緑地部公園緑地課  
たつみ写真スタジオ 丹生サーヴェイ 井上測量(株) 前橋文化財研究所  
スカイサーべイ

## 内堀遺跡群 VII

平成7年3月24日 印刷  
平成7年3月31日 発行

編集発行 前橋市教育委員会文化財保護課  
〒371 前橋市上泉町664-4  
TEL 0272-31-9531

印刷 朝日印刷工業株式会社









